（財）大阪府文化財センター調査報告書　第125集

寝屋川市

大　尾　遺　跡　Ⅱ

一般国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人　大阪府文化財センター

序　　文

本書は第二京阪道路建設に伴う大尾遺跡の発掘調査報告書です。

大尾遺跡は大阪府寝屋川市国守町に所在する弥生時代から中世に至る複合遺跡で、枚方丘陵の西端部に立地し、周辺には太秦遺跡、太秦古墳群、高宮遺跡、高宮廃寺跡、小路遺跡などの遺跡が分布しております。当センターは平成12年度から13年度にわたり大尾遺跡の確認調査ならびに発掘調査を実施し、弥生時代中期の方形周溝墓群や古代の掘立柱建物群を検出するなど、重要な成果を挙げて参りました。

今回の発掘調査では、大尾遺跡で初例となる弥生時代中期の竪穴住居をはじめ、古代の竪穴住居や掘立柱建物群を検出することができました。竪穴住居の検出例は、当遺跡における居住域の一端を明らかにし、さらに東接する太秦遺跡との連続性を示唆する重要な成果であります。また、掘立柱建物群は前回発掘調査の掘立柱建物群の広がりを確認するとともに、西接するほぼ同時期の「高宮廃寺跡」との関連も指摘されます。これら成果は北河内地域の歴史を解明する考古資料であり、さらに、当センターの事業ならびに埋蔵文化財についての普及啓発の一助となることを願って止みません。

最後に、発掘調査にあたって御指導、御協力頂きました大阪府教育委員会、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、日本道路公団関西支社枚方工事事務所、大阪府枚方土木事務所、および地元自治会をはじめとする地元関係各位には深く感謝致します。

2005年２月

財団法人　大阪府文化財センター

理事長　水　野　正　好

例　　言

1．本書は、大阪府寝屋川市国守町に所在する大尾遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所から財団法人大阪府文化財センターが平成15年４月１日～平成16年３月31日の間委託を受け、日本道路公団関西支社枚方工事事務所の協力、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、現地調査は平成15年５月14日～12月26日、整理作業は現地調査と併行して行い、平成16年３月31日に終了した。

3．本調査は、財団法人大阪府文化財センター　調査部長 玉井　功、調整課長 赤木克視、京阪支所長（現京阪調査事務所長）渡邊昌宏、調査第三係長 岡戸哲紀の指示のもと、主査 辻　裕司、専門調査員 清岡廣子が実施した。

4．本調査の調査名称は、『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』(2003年)の【遺跡名－調査年度－同年度・同一遺跡における調査次数】に従い「大尾遺跡03－1」とした。

5．各調査区および遺構の写真撮影は調査担当者が実施し、遺物の写真撮影・焼き付け、遺構写真の焼き付けは、京阪調査事務所 主査 上野貞子が担当した。

6．調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課をはじめとし、下記の方々にご指導・ご協力を賜わった。記して謝意を表したい。(敬称略、順不同)

　寝屋川市教育委員会

現地調査および整理作業の参加者は以下の通りである。

　現地調査：松田直子　吉田誉子　平野貴之　大塚達夫

　整理作業：松田直子　波岸初美

7．本書の執筆は、辻・清岡が分担した。なお、編集は辻が行った。

8．本調査に係わる遺物・写真・実測図などは財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1．図中の方位・座標値は、世界測地系(測地成果2000)の平面直角座標系VIによる。ただし、単位(m)を省略している。遺跡の測量基準点設置は、株式会社アコードが行った。

2．遺構および断面図の標高は、東京湾平均海水面(T.P.)を基準とし、単位は(m)を用いて小数点第二位までを表している。

3．本書中の地図は、国土地理院発行の地形図(１：50,000)「大阪北東部」および、寝屋川市地形図(１：2,500)を調整して使用した。

4．本書中の土色の色調表示は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』1999年版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修に準拠した。

5．遺構表記は、原則として遺構番号＋遺構の種類(例：１溝)で表している。遺構番号は、遺構の種類に係わらず通し番号を付した。従って、遺構番号は各遺構の総数を表すものではない。検出した遺構のうち、複数の遺構からなるまとまりのある遺構は、上記遺構番号の上位に、遺構種類＋同種遺構番号(例：竪穴住居１・建物１)で表している。

6．遺構実測図は１：80を原則とする。各平面図および断面図はこの限りではない。各図にはスケールを添付し、縮尺率は各図キャプション末尾に表示した。

7．遺物実測図は１：４を原則とする。各図にはスケールを添付し、縮尺率は各図キャプション末尾に表示した。

8．現地調査および整理作業は、当センターが制定した『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』(2003年)に基づいて行った。

目　　次

序　文……i
例　言……iii
凡　例……iv
目　次……v
第１章　調査に至る経緯と方法……（ 辻 ）……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査方法……2
第２章　位置と環境……（清岡）……5
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……5
第３章　調査成果……（ 辻 ）……11
　第１節　調査成果の概要……11
　第２節　基本層序……12
　第３節　遺構……14
　第４節　遺物……（清岡）……32
第４章　まとめ……（辻・清岡）……39
　第１節　遺跡の立地と遺構分布……39
　第２節　調査成果の検討……40

図　版　目　次

図版 1 遺跡　1 1区 全景（北東から）　2 1区 北半全景（西北西から）
図版 2 遺跡　1 1区 7谷全景（南南東から）　2 1区 19土坑（東から）
　3 1区 柵1（東から）　4 1区 5溝（北西から）
　5 1区 4溝・17溝（西北西から）
図版 3 遺跡　1 1区 7谷東西断面（東から）　2 1区 7谷南北断面1（南東から）
　3 1区 7谷南北断面2（南南東から）　4 1区 7谷北肩口遺物包含層（南東から）
　5 1区 7谷遺物出土状況（南西から）　6 1区 7谷北肩口遺物出土状況（北東から）
　7 1区 7谷東部遺物包含層（南西から）　8 1区 7谷南東部遺物包含層（南西から）
図版 4 遺跡　1 2区 南半全景（北西から）　2 2区 南東部全景（北北西から）
図版 5 遺跡　1 2区 北東部全景（北西から）　2 2区 竪穴住居2・3（西北西から）
　3 2区 338土坑（南東から）　4 2区 竪穴住居1（西から）
　5 2区 竪穴住居1内土器検出状況（東から）
図版 6 遺跡　1 2区 建物3（東から）　2 2区 180土坑（東から）
　3 2区 181溝（南西から）　4 2区 建物1・2（北から）
　5 2区 建物4（東から）
図版 7 遺跡　1 2区 建物11～14（北北東から）　2 2区 建物5（北北西から）
　3 2区 建物12（北北東から）　4 2区 建物7・8（北から）

5　２区 建物９・10(北北東から)
図版 8 遺跡　1　２区 北半全景(西南西から)　2　２区 建物６(東南東から)
3　２区 200土坑(南南西から)　4　２区 西端全景(南南西から)
5　２区 西端柱穴検出状況(南東から)
図版 9 遺物　338土坑、19土坑、213土坑、竪穴住居１、133柱穴
図版 10 遺物　竪穴住居１上面、７谷古代遺物包含層、７谷北肩口遺物包含層
図版 11 遺物　７谷古代遺物包含層、７谷南東肩口遺物包含層、７谷北肩口遺物包含層、７谷中世遺物包含層
図版 12 遺物　古代整地土層、中世遺物包含層、建物３、５溝

挿　図　目　次

図１　調査地点位置図……1
図２　地区割図……3
図３　調査区配置図……4
図４　調査地点周辺遺跡分布図……6
図５　地山面等高線図……11
図６　調査区断面柱状模式図……12
図７　調査区平面図……13
図８　竪穴住居１～３実測図……15
図９　建物１・２実測図……17
図10　建物３・４実測図……18
図11　建物５・６実測図……19
図12　建物７・８実測図……20
図13　建物９・10実測図……22
図14　建物11・12実測図……23
図15　建物13～15実測図……24
図16　建物16・17、柵１・２実測図……25
図17　19・180・200・213・280土坑実測図……27
図18　12・181溝実測図……28
図19　整地土層・遺物包含層分布図……29
図20　７谷および丘陵部断面図……30
図21　遺物実測図１……32
図22　遺物実測図２……34
図23　遺物実測図３……37
図24　大尾遺跡現況等高線図……39
図25　遺構変遷図……41

表　目　次

表１　新旧座標数値対照表……2
表２　掘立柱建物・柵・柱列計測値一覧表……43

第１章　調査に至る経緯と方法

第１節　調査に至る経緯

大尾（だいび）遺跡は大阪府寝屋川市国守町に所在する弥生時代から中世に至る複合遺跡である。

当該地に一般国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設が計画されたことにより、財団法人大阪府文化財センターは平成12年度[1]・13年度[2]の２箇年にわたり確認調査を実施した。また、平成13年度には大尾遺跡発掘調査（大尾遺跡その１）[3]を実施している。平成13年度発掘調査地点は、当遺跡では最も標高の高い北部から南西方向へ緩やかに下がる幅約70m程度の丘陵部上にあり、弥生時代・古墳時代および古代から中世に至る遺構が多数検出された。

本埋蔵文化財発掘調査は、上記成果に基づき、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所の委託を受けた当センターが、日本道路公団関西支社枚方工事事務所、大阪府枚方土木事務所の協力、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、平成15年５月から同年12月までの間、実施したものである。
調査面積は4,143㎡である。

大尾遺跡は生駒山地西麓から派生した丘陵の西端部上に位置する遺跡で、現地形は北東から南西方向へ向かって舌状に張り出す丘陵と、丘陵間の開析谷からなる。当遺跡から北東方向へ延長する丘陵上には太秦（うずまさ）遺跡・太秦古墳群が、南西方向の沖積地に向かって下がる段丘上には高宮遺跡・高宮廃寺跡・小路遺跡などの遺跡が分布する。

発掘調査対象地は、平成13年度発掘調査地点との間に開析谷を挟み北東側に位置する。対象地内は北西から南東方向へ延長する平坦な丘陵部と、丘陵部から南西方向へ下がる開析谷からなる。

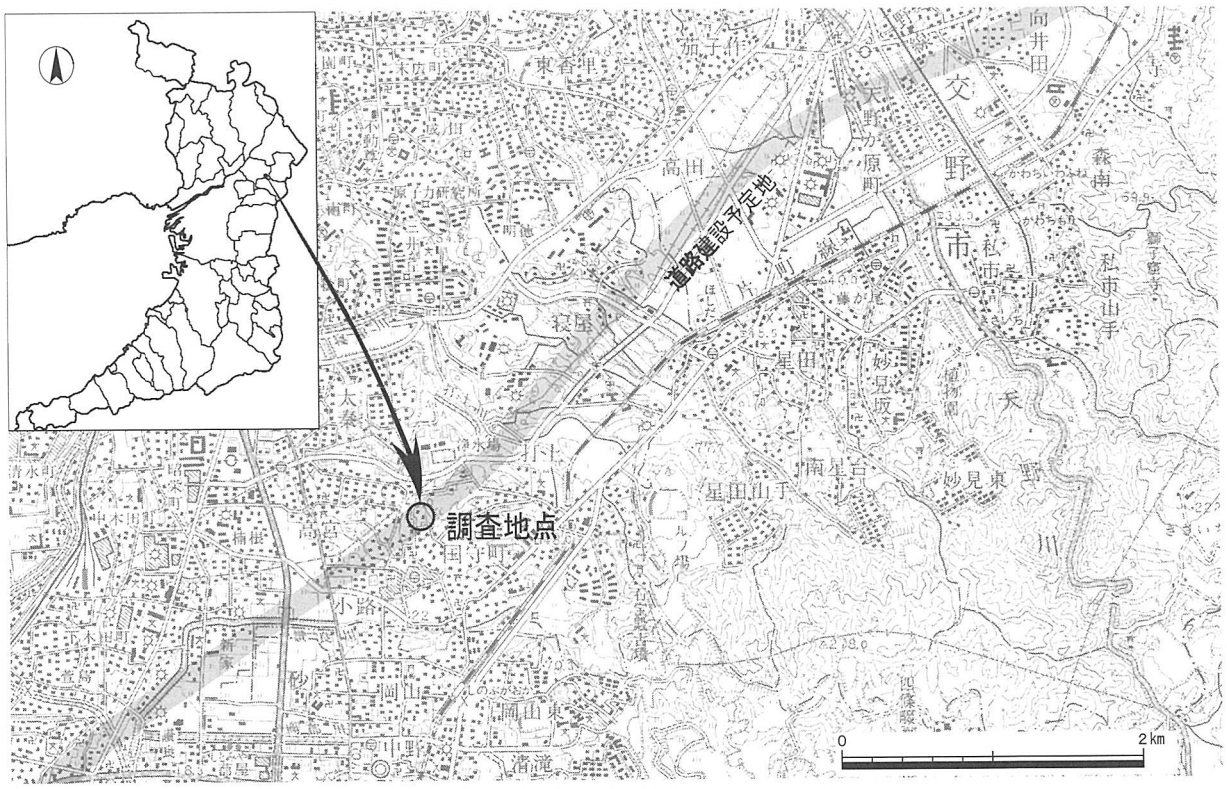


図１　調査地点位置図（１：50,000）

第２節　調査方法

調査対象地内の現況は、丘陵部・谷部を含め概して平坦面を呈するが、丘陵部・谷部間は段差を有する。調査区は重機および人力による排土場所の確保などを考慮し、調査対象地内を１・２区の２箇所に分けて調査を進めることとした。１区は主に谷地形を呈する箇所に設定した調査区で、丘陵南西端から谷地形にかけての地区に相当する。２区は丘陵平坦部に設定した調査区である。調査は重機により表土層や盛土層、近代・近世の耕作土層を除去した。その後人力による掘削、遺構検出を進め、弥生時代から中世に至る遺構を検出した。

調査を進めるにあたっては、当センターが制定した『遺跡調査基本マニュアル』[4)]を基に、遺構登録、遺物登録、遺構実測図作成を行った。

地区割りは平面直角座標系Ⅵ(世界測地系)[5)]による。地区割りの詳細については図２を参照されたいが、調査では遺構検出地点表示および遺物取り上げ表示は第Ⅳ区画を使用している。

遺構番号は遺構の種類を問わず、１・２区を通して検出した順に１から番号を遺構名称の前に付した(例：１柱穴・２溝など)。また、遺構番号を付した遺構であっても建物や柵などまとまりのあるものは、遺構番号とは別に新たに遺構名称の後に遺構番号を連番で付した(例：建物１・竪穴住居１など)。

遺構の平面測量は、ヘリコプターによる写真測量を実施し、縮尺50分の１ならびに100分の１の平面図を作成した。なお、必要に応じて第Ⅳ区画の基準線を使用し縮尺20分の１平面図・断面図・見通し図を作成している。遺物取り上げは、原則として地区割りの第Ⅳ区画および遺構番号を基に行った。

表１　新旧座標数値対照表

世界測地系(測地成果2000)		日本測地系(改正前)	
X=－137,900	Y=－32,700	X=－138,246.6941	Y=－32,438.8868
X=－137,900	Y=－32,800	X=－138,246.6959	Y=－32,538.8873
X=－138,000	Y=－32,700	X=－138,146.6931	Y=－32,438.8882
X=－138,000	Y=－32,800	X=－138,146.6949	Y=－32,538.8883

註

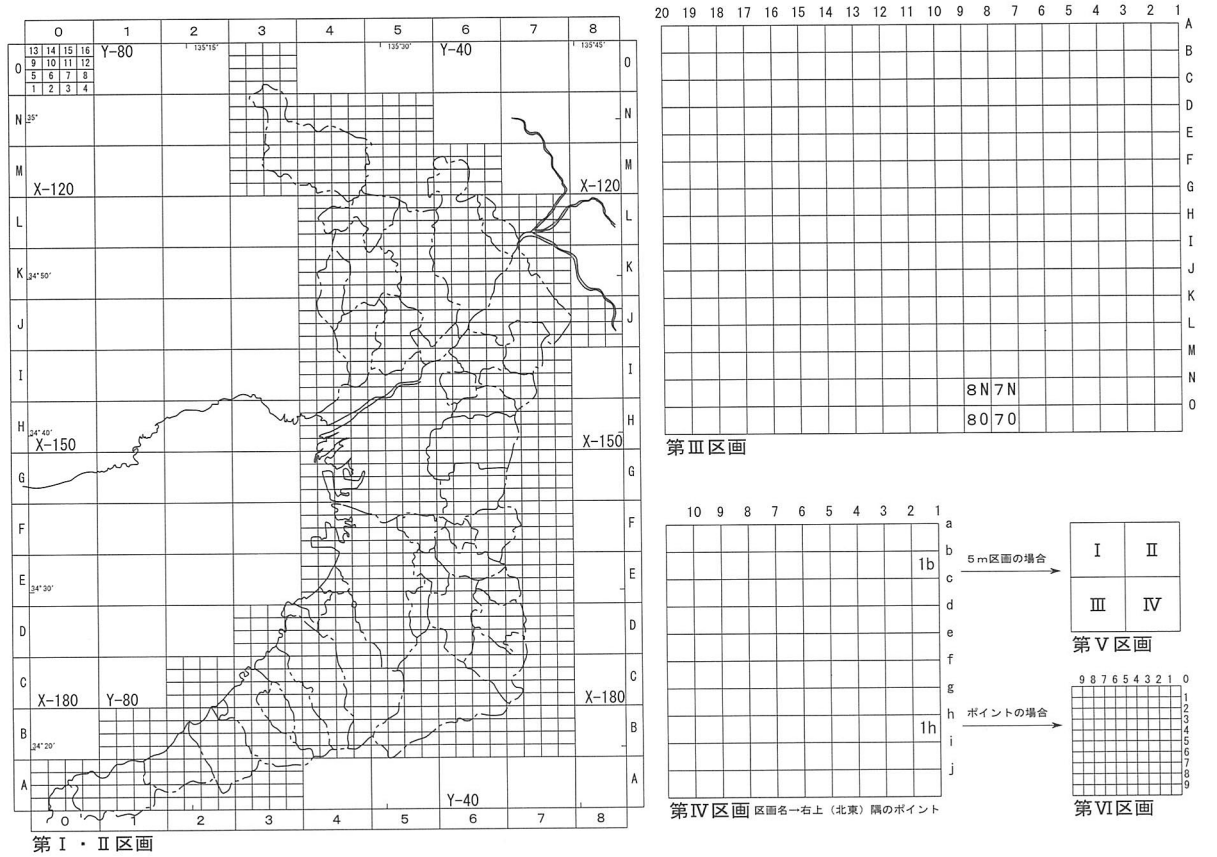
1）(財)大阪府文化財センター　2002年　『讃良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区』一般国道１号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書　(財)大阪府文化財センター調査報告書 第77集

2）(財)大阪府文化財センター　2003年　『門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区』一般国道１号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書　(財)大阪府文化財センター調査報告書 第93集

3）(財)大阪府文化財センター　2003年　『大尾遺跡』一般国道１号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書　(財)大阪府文化財センター調査報告書 第92集

4）(財)大阪府文化財センター　2003年　『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』

5）地区割りは平面直角座標系Ⅵ(世界測地系)によるが、前回(平成13年度)調査当時は日本測地系を使用していたことから、両測地系の対照座標数値(変換は国土地理院のTKY2JGDで行った)を表１に示しておく。各座標交点の位置は、図２を参照されたい。


Y-80
Y-40
X-120
X-150
X-180
第Ⅰ・Ⅱ区画
8N 7N
80 70
第Ⅲ区画
1b
1h
第Ⅳ区画 区画名→右上（北東）隅のポイント
５m区画の場合
Ⅰ Ⅱ
Ⅲ Ⅳ
第Ⅴ区画
ポイントの場合
第Ⅵ区画

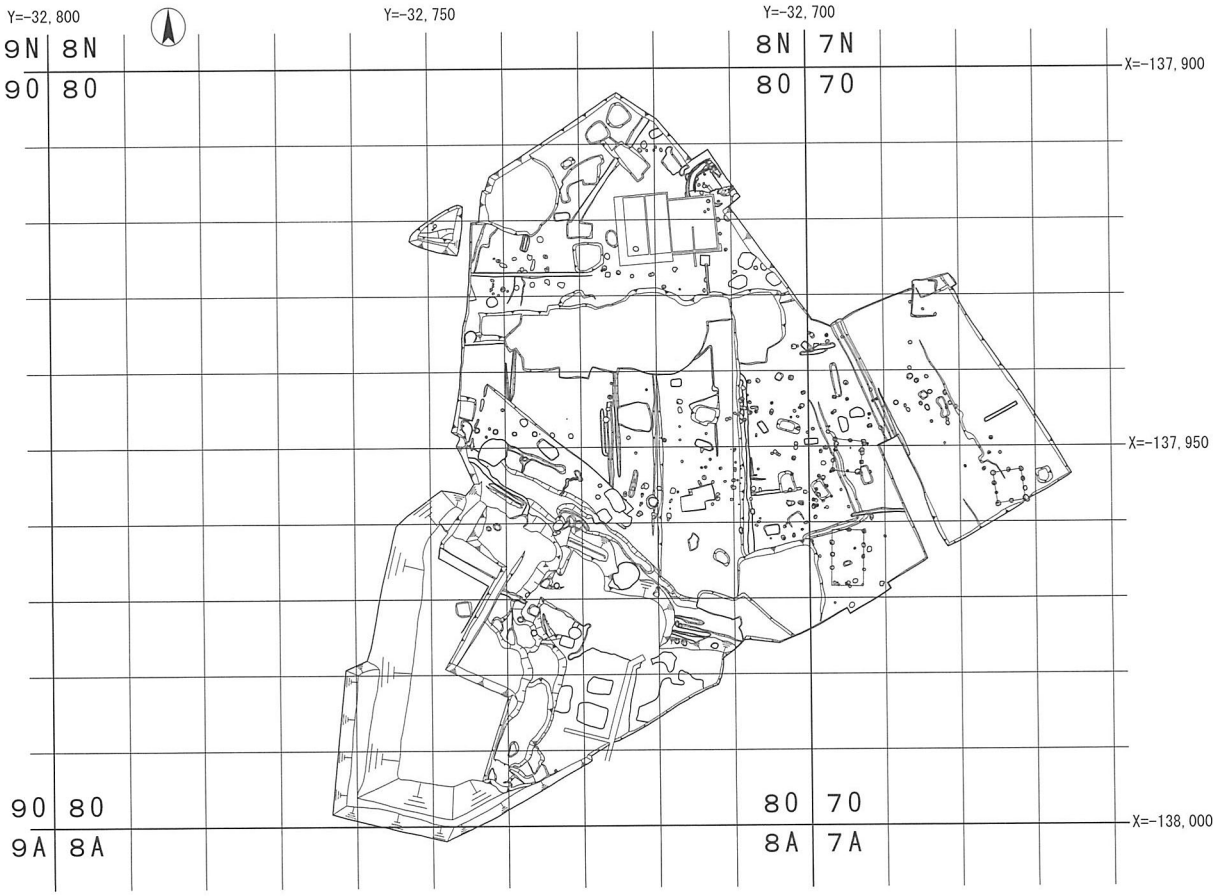

Y=-32, 800
Y=-32, 750
Y=-32, 700
9N 8N
90 80
8N 7N
80 70
X=-137, 900
X=-137, 950
X=-138, 000
90 80
9A 8A
80 70
8A 7A

図２　地区割図

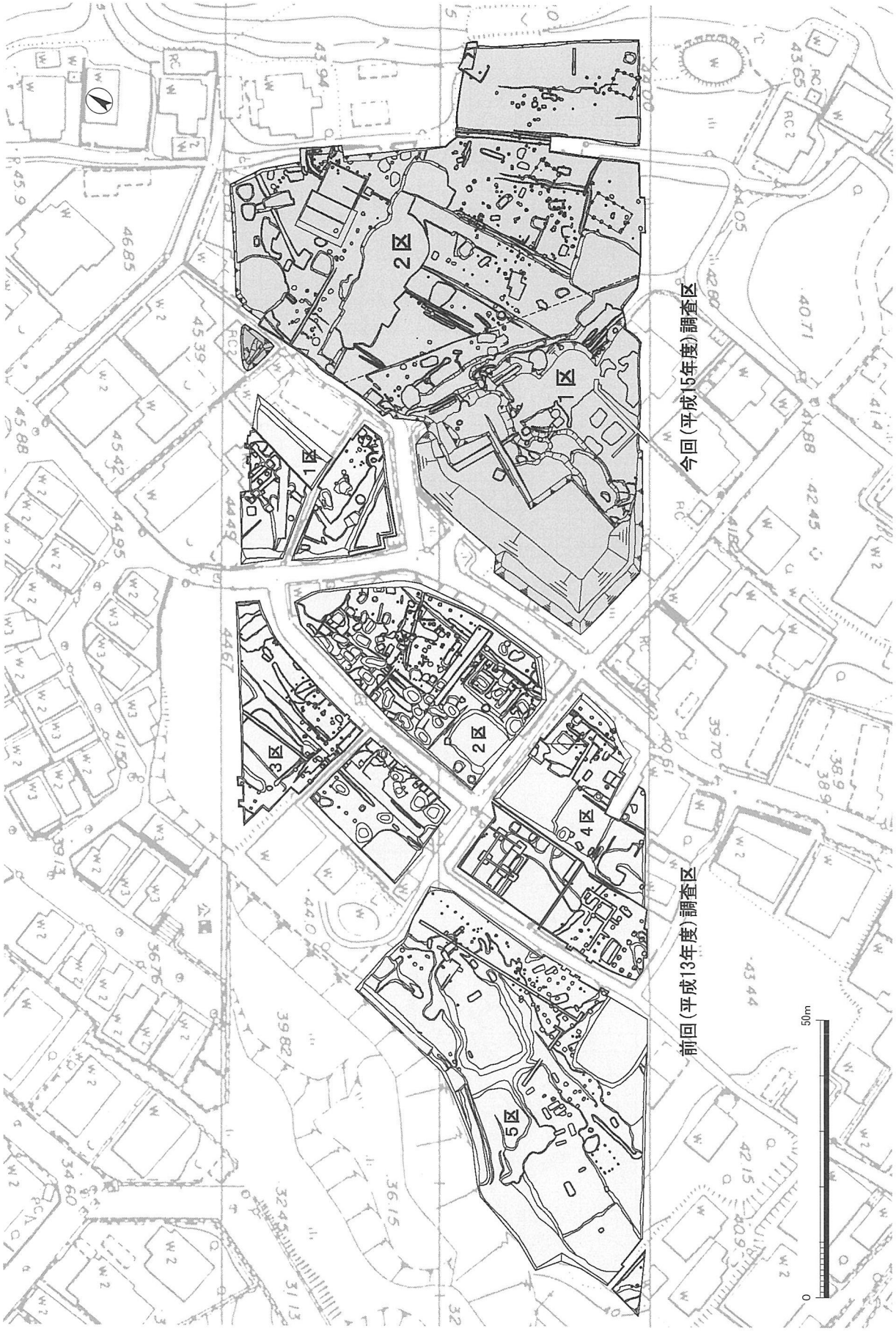


図３　調査区配置図（１：1,000）

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

大尾遺跡が所在する寝屋川市は大阪平野の北東部に位置し、市域東側は生駒山地および枚方丘陵が連なる。市域西側には北東から南西方向に流れる淀川があり、丘陵と淀川間には沖積地が広がる。大尾遺跡は大阪平野を一望する標高40～45mの丘陵上に立地する。この丘陵は生駒山地から派生し、浸食作用によって舌状に張り出す尾根と谷地形が入り組んで起伏に富む地形を呈する。丘陵を開析した小河川は西流し、丘陵裾には扇状地形が形成された。扇状地の縁辺部は旧河内湾、旧河内潟の汀線に相当する。

淀川左岸流域である寝屋川市域には寝屋川、古川があり、調査地点周辺では北側に流れるたち川と打上川が合流して寝屋川に注ぎ込み、南側では讃良川が岡部川に合流し寝屋川となる。河川の氾濫等による沖積作用は、淀川左岸に自然堤防や後背湿地を形成した。

調査地点の東方には河内を縦断する東高野街道が、西方には京都から大阪へと向かう京街道と東高野街道を結ぶ河内街道が通じている。現在でも当該地域には条里制地割が良好に遺存している。

第２節　歴史的環境

大尾遺跡が所在する北河内地域には、旧石器時代以降の遺跡が分布し、国指定史跡をはじめ府市指定の文化財がある。大尾遺跡では平成13年度調査で弥生時代中期から中世に至る遺構を検出し、当該地周辺の歴史を考える上で重要な遺跡である。ここでは大尾遺跡周辺の歴史的な環境について概述する。

１　旧石器時代

生駒山西麓の打上（うちあげ）遺跡、太秦（うずまさ）遺跡、高宮（たかみや）遺跡、更良岡山（さらおかやま）遺跡、讃良川（さらがわ）河床遺跡、岡山南遺跡では国府型ナイフ形石器が、高宮遺跡、南山下（みなみさげ）遺跡では有舌尖頭器が出土している。

２　縄文時代

縄文時代前期の遺跡として高宮遺跡が知られている。平成13年度から実施している讃良郡条里遺跡の調査で縄文時代早期に属する石器の出土や縄文時代前期後葉の石器製作跡を検出するなどの成果があり、周辺に縄文時代早期、前期の遺跡が広がることを確認しつつあり、調査の進展が待たれる。

縄文時代中期から後期の遺跡には、讃良川遺跡、更良岡山遺跡、砂遺跡、讃良郡条里（さらぐんじょうり）遺跡、小路（しょうじ）遺跡、高宮遺跡がある。讃良川流域の讃良川遺跡は縄文時代中期初頭に出現し、船元式を中心に縄文時代中期末まで継続する拠点的な集落で、縄文時代後期には更良岡山遺跡に移動し、晩期まで継続する。砂遺跡では縄文時代中期後半、後期後半の遺物が出土した。讃良郡条里遺跡、小路遺跡、高宮遺跡では縄文時代中期から後期の船元式、中津式、北白川上層式、元住吉山式などの土器が出土している。周辺には縄文時代前期から継続して集落が営まれたことが窺える。

縄文時代晩期の遺跡には、砂遺跡、更良岡山遺跡、雁屋（かりや）遺跡、長保寺（ちょうぼじ）遺跡、高宮八丁（たかみやはっちょう）遺跡がある。砂遺跡で土器棺、土壙墓が検出され、滋賀里式から長原式の土器が出土した。長保寺遺跡では滋賀里式が、雁屋遺跡では長原式が出土した。高宮八丁遺跡では滋賀里式から長原式の土器が確認された。

３　弥生時代

弥生時代前期の遺跡には、雁屋遺跡、高宮八丁遺跡、長保寺遺跡、讃良郡条里遺跡、蔀屋北（しとみやきた）遺跡があ

る。雁屋遺跡や高宮八丁遺跡は縄文時代晩期から継続性がみられ、弥生時代の開始を裏付ける。雁屋遺跡は弥生時代後期まで継続する拠点的な集落で、高宮八丁遺跡は弥生時代中期前半まで存続し、玉や石器の製作が窺える。長保寺遺跡、讃良郡条里遺跡、蔀屋北遺跡では遺物などを確認している。

弥生時代中期の遺跡には、雁屋遺跡、高宮八丁遺跡、長保寺遺跡、太秦遺跡、大尾遺跡、高宮遺跡、小路遺跡、讃良郡条里遺跡、国守（くにもり）遺跡、讃良川遺跡、更良岡山遺跡、鎌田遺跡などがある。太秦遺跡は弥生時代中期前葉に出現する高地性集落で、土器、石槍、石剣などの採集資料により弥生時代中期中葉から後葉にかけての遺跡と周知されていた。平成15年度調査では弥生時代中期後半の竪穴住居39棟、方形周溝墓１基、土坑などを検出した。遺構の稠密度から集落の中枢域とみられ、弥生時代中期の北河内における拠点集落の一つに位置付けられる。大尾遺跡の平成13年度調査で弥生時代中期後半の方形周溝

図４　調査地点周辺遺跡分布図（１：25,000）

墓を30基以上検出した。太秦遺跡と大尾遺跡は同時期の居住域と墓域が隣接していることが明らかとなった。高宮遺跡では平成13・14年度調査で弥生時代中期末葉から後期の方形周溝墓群を検出し、大尾遺跡から高宮遺跡への墓域の移動が窺える。讃良郡条里遺跡では平成13年度以降遺跡南半一帯を調査、弥生時代中期の遺構や遺物を検出しており、新たな集落跡として想定される。雁屋遺跡では弥生時代中期後半の方形周溝墓群が、近接する鎌田遺跡でも方形周溝墓群が検出されている。

弥生時代後期の遺跡には、雁屋遺跡、蔀屋北遺跡、小路遺跡、高宮遺跡、讃良郡条里遺跡、太秦遺跡、打上遺跡、打上中道遺跡、池の瀬遺跡、寝屋（ねや）遺跡、長保寺遺跡、楠遺跡がある。雁屋遺跡では竪穴住居、土坑、溝、方形周溝墓が検出された。太秦遺跡では豊野浄水場試掘調査で遺物が出土しており、遺跡が継続するようである。楠遺跡では青銅器鋳造関連遺物の土製鋳型外枠や取瓶としての使用が考えられる高杯状土製品があり、弥生時代後期初頭に青銅器製作がなされていたことが窺える。砂・岡山周辺で明治44年に砂山銅鐸が発見され、雁屋遺跡では銅鐸の舌が出土している。

弥生時代終末の庄内式期[1)]の遺跡には、長保寺遺跡、北木田遺跡、讃良郡条里遺跡、小路遺跡、高宮遺跡、蔀屋北遺跡がある。長保寺遺跡では土坑、自然流路から庄内式甕および庄内式併行期の土器群が出土した。平成15年度調査の讃良郡条里遺跡では掘立柱建物、井戸、溝、水田などと、周囲に溝が巡る竪穴住居やベッド状遺構をもつ住居を検出した。

高宮八丁遺跡から雁屋遺跡までの間には長保寺遺跡、讃良郡条里遺跡、蔀屋北遺跡などの遺跡が位置しており、さらに未検出の集落が存在する可能性が高いと思われる。長保寺遺跡、讃良郡条里遺跡、蔀屋北遺跡では、遺構が乏しいものの弥生時代に継続もしくは断続的に遺物が出土しており、弥生時代の遺跡が密に分布することがわかりつつある。今後、この地域の遺跡間の関係が注目される。

４　古墳時代

古墳時代前期の遺跡分布は古墳時代中期以降に比べると稀薄であるが、楠遺跡、高宮八丁遺跡、讃良郡条里遺跡、小路遺跡、高宮遺跡、讃良川遺跡がある。小路遺跡、高宮遺跡では、全長22.7mの前方後方形周溝墓をはじめ一辺３～４mおよび一辺10m前後の規模の方形周溝墓群を検出した。法復（ほふくじ）寺遺跡では陶質土器が出土している。

古墳時代中期以降に北河内地域では集落数が爆発的に増加する傾向がみられ、多くの遺跡で初期須恵器、韓式系土器、製塩土器や、馬に関連する遺構・遺物が確認されている。地名に「秦」、「太秦」と残ることからも渡来系氏族の存在が示唆され、古代の牧、河内馬飼氏などの馬飼集団の存在が窺える。『古事記』、『日本書紀』には仁徳天皇の御代に淀川左岸に「茨田堤」を築き、「茨田屯倉」を設置したことが記され、当該地域の開発との関係が注目される。

古墳時代中期から後期には、高宮遺跡、大尾遺跡、太秦遺跡、国守遺跡、高宮八丁遺跡、法復寺遺跡、長保寺遺跡、北木田遺跡、楠遺跡、讃良郡条里遺跡、蔀屋北遺跡、奈良井遺跡、中野遺跡、岡山南遺跡など、丘陵と沖積地の双方に集落が営まれる。高宮遺跡では作り付け竈のある竪穴住居を含めて古墳時代中期の竪穴住居29棟を、太秦遺跡では古墳時代後期の竪穴住居を検出し、居住域の移動や太秦古墳群との関連性が注目される。讃良郡条里遺跡では古墳時代中期から後期の水田、溝、土坑、井戸を検出した。長保寺遺跡、楠遺跡、岡山南遺跡では古墳時代中期の掘立柱建物が、北木田遺跡、蔀屋北遺跡では古墳時代中期の竪穴住居が検出された。奈良井遺跡では製塩の石敷精製炉と方形周溝状遺構内に馬埋葬土坑があり、蔀屋北遺跡でも馬埋葬土坑が確認された。北木田遺跡、楠遺跡、蔀屋北遺跡で古墳時代後期の掘立柱建物が検出された。

一方、古墳は生駒山西麓から丘陵山腹にかけて分布する。前期には忍岡古墳、中期には墓ノ堂古墳が築かれ、中期後半から後期にかけて太秦古墳群、更良岡山古墳群、大上古墳群・清滝古墳群が形成される。後期に太秦１号墳、廻シ塚古墳、モロ塚古墳、奥山１号墳、打上古墳、寝屋古墳が、終末期には石宝殿古墳が造られている。

忍岡古墳（府指定史跡）は忍陵神社に所在する全長90ｍの前方後円墳で竪穴式石室を埋葬施設とし、碧玉製腕飾類、鉄製武具が副葬されていた。現在、竪穴式石室が保存公開されている。

更良岡山古墳群は５世紀後半の全長27ｍの帆立貝式古墳を中心として円墳、方墳で構成され、三味頭（さみがしら）遺跡では一辺15ｍの方墳が検出された。これらの古墳の周溝からは円筒埴輪、蓋形、家形、水鳥形などの形象埴輪が出土した。墓ノ堂古墳の東方には更良岡山古墳群と同時期に同様な規模の円墳、方墳、帆立貝式古墳が造られた大上古墳群がある。古墳時代後期には清滝古墳群とともに横穴式石室をもつ古墳が築かれる。清滝古墳群の一部の古墳は正法寺造営時に破壊された。

太秦古墳群には地名にモロ塚、小金塚、向イ塚などが残るが、太秦高塚古墳以外は宅地開発などに伴い消滅した。太秦高塚古墳（市指定史跡）は５世紀後半に築かれた径37ｍの円墳で、墳丘には円筒埴輪列が巡る。葺石は敷かれていない可能性がある。造り出しをもち、人物、水鳥、盾形などの埴輪が配されていた。主体部は木棺直葬である。副葬品には短甲、鏃、馬具がある。現在、墳丘整備を行い公開されている。周辺では土器、甲冑形埴輪、鉄鏃、銅鏃、刀子、直刀、雲珠、金環、三環鈴、獣帯六鈴鏡、方格規矩鏡、子持勾玉、紡錘車などが採集され、熱田神社周辺出土の鹿形埴輪は市指定文化財となっている。太秦中町では方墳が調査で検出され、周溝から６世紀後半の土器や水鳥形、鶏形などの埴輪が出土した。豊野浄水場の調査では人形、蓋形、盾形などの形象埴輪が出土している。太秦北遺跡、太秦元町遺跡では古墳時代中期後半の遺物が確認された。平成13・15年度に調査した太秦古墳群尾支群では５世紀後半から６世紀前半の一辺７～10ｍの方墳23基、径８ｍの円墳２基を検出し、墳丘に埴輪が巡るものがある。太秦１号墳は径12ｍの円墳で、昭和50年に消滅した廻シ塚古墳は径20ｍ程の円墳であった。

６世紀後半から７世紀初頭には寝屋古墳や奥山１号墳が築かれる。寝屋古墳(府指定史跡)は約22ｍの円墳で、北河内最大の全長約10ｍの横穴式石室をもつ。奥山１号墳は平成14年に発見された古墳で、平成15年度調査で径約18ｍの円墳で横穴式石室をもち、追葬が行われたことが明らかとなった。

石宝殿古墳（国指定史跡）は横口式石槨を埋葬施設とし、八角形墳の可能性も示唆された。打上神社に所在し、封土は失われ花崗岩が露出していたが、現在、覆屋をかけ保存されている。

なお、打上には『河内名所図会』で「八十塚」とも言われるほど塚があったとされるが、現在は石材が散布する程度であり、打上所在の明光寺には石棺を転用した「雷神石」と呼ばれる石碑が存在する。さらに、太秦古墳群の北方に所在する三井、国松周辺の丘陵には現存する古墳は全くないが、三井南遺跡周辺で採集された古墳時代後期の須恵器、埴輪により古墳の存在が推定されている。生駒山西麓から枚方丘陵には多数の古墳が築かれていたことが推察されている。

５　古代

古代には北河内に讃良郡、茨田郡、交野郡が置かれた。讃良郡には白鳳期に創建された国指定史跡の高宮廃寺跡をはじめ、太秦廃寺跡、讃良寺跡、正法寺跡が約１㎞圏内に点在する。高宮廃寺跡は延喜式内社大社御祖神社境内一帯に所在し、薬師寺式伽藍配置をもつ。白鳳期に創建され、平安時代には一旦廃絶する。太秦廃寺跡は熱田神社付近に所在する。讃良川右岸に所在する讃良寺跡は白鳳期の軒平瓦が、北接する三味頭遺跡でも軒平瓦が出土した。正法寺跡は白鳳期に創建され、薬師寺式伽藍配置をもつ寺

院である。

飛鳥時代の遺跡には、高宮遺跡、大尾遺跡、太秦遺跡、太秦北遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、国守遺跡などがある。高宮遺跡では高宮廃寺跡の周囲で飛鳥時代の竪穴住居、掘立柱建物、柵、井戸が検出されており、南側に隣接する丘陵での平成13・14年度調査でも飛鳥時代の掘立柱建物、土坑、奈良時代前半の柱列、土坑を確認した。大尾遺跡では平成13年度と平成15年度調査を合わせ38棟の飛鳥時代後半から奈良時代前半の掘立柱建物を検出し、太秦遺跡では平成15年度調査で掘立柱建物群と竪穴住居を検出した。両遺跡では飛鳥時代から奈良時代の瓦が出土しており、高宮廃寺跡との関連性が窺える。さらに太秦遺跡の北東方に位置する寝屋東遺跡では７世紀中葉から後葉の掘立柱建物群、竪穴住居を、寝屋南遺跡では７世紀中葉の掘立柱建物と竪穴住居を検出し、丘陵上に短期間の集落が営まれたことが判明している。高宮遺跡や寝屋南遺跡では掘立柱建物と竪穴住居が共存している。丘陵平坦面に立地する遺跡では、掘立柱建物群に規格的配置がみられる。飛鳥時代に時期が限られる遺跡もあり、飛鳥時代は丘陵の開発による土地利用が活発であったことが窺える。

奈良時代から平安時代にかけて高宮遺跡、讃良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、北木田遺跡、長保寺遺跡、太秦北遺跡、法復寺遺跡などの遺跡が分布する。高宮遺跡では奈良時代後半に大型建物を含む掘立柱建物が検出され、大規模な土地造成を行ったことが明らかとなった。西側に隣接する讃良郡条里遺跡では奈良時代から平安時代の掘立柱建物、井戸、井堰を検出し、井堰からは絵馬、人形、人面墨書土器など水辺の祭祀に関わる遺物が出土した。高宮遺跡、小路遺跡、讃良郡条里遺跡では高宮廃寺所用の軒瓦が、讃良郡条里遺跡から石製銙具が出土し、高宮廃寺跡との位置関係などから官衙的な性格をもつと想定された。正法寺跡の周囲でも木間池北方遺跡など奈良時代に官衙や寺院関連施設に想定される遺跡がある。打上遺跡、北木田遺跡では奈良時代の掘立柱建物が、太秦北遺跡では奈良時代後半の遺物が確認された。長保寺遺跡では奈良時代後半から平安時代前半の掘立柱建物が、中野遺跡では平安時代の掘立柱建物が検出された。法復寺遺跡では平安時代後半に集落跡が営まれたことが判明している。

このように周辺で古代の遺跡が展開する。古代の讃良郡の郡家の推定地に讃良寺跡周辺が挙げられ、平安時代の南海道の駅家が讃良郡の槻本に置かれているが、所在地の特定には至っていない。高宮遺跡、讃良郡条里遺跡など官衙的な掘立柱建物群で構成された遺跡があり、出土遺物などから奈良時代後半から平安時代前半の郡家の候補地として挙げられており、今後所在地の特定に期待がかかる。

６　中世

平安時代後期から中世には讃良庄、鞆呂岐荘、河内十七箇所などの荘園が成立する。東高野街道沿いには寝屋東遺跡、寝屋遺跡、寝屋南遺跡、打上遺跡、国守遺跡、坪井遺跡、岡山南遺跡、中野遺跡などの遺跡が立地する。高宮廃寺跡は中世には大社御祖神社の神宮寺として再建される。高宮遺跡では鎌倉時代の礎石建物、掘立柱建物、井戸を検出し、土壙墓から烏帽子が出土している。大尾遺跡では室町時代の火葬墓を検出した。大尾遺跡、太秦元町遺跡、太秦遺跡などで中世の遺物が出土した。巣本遺跡では鎌倉時代、長保寺遺跡では鎌倉時代から室町時代の集落跡が検出されている。高宮遺跡、小路遺跡、讃良郡条里遺跡は平安時代中期以降に耕地化し、近世まで水田が継続する。近年の調査成果で確実に時期の判明する条里地割は中世にまで遡る。

註

1）庄内式土器は弥生時代終末もしくは古墳時代初頭の位置付けがなされる土器型式である。庄内式土器は大和や河内でも全域で使用されることはなく、大和盆地東南部、中河内という特定の地域で製作された土器である。北河内でも弥生時代後期の甕は継続して使用されており、弥生土器様式が継続するという認識から、ここでは、庄内式および庄内併行期の土器は、弥生時代後期に属する土器と捉えている。関川尚功 1988年　「弥生土器から土師器へ」『季刊考古学』　24号　雄山閣

参考文献

寝屋川市 1956年 『寝屋川市誌』

寝屋川市 1966年 『寝屋川市誌』

寝屋川市史編纂委員会 1998年 『寝屋川市史』 第１巻

寝屋川市教育委員会 1979年 『片町線複線化に伴う国守遺跡発掘調査概要報告』

寝屋川市教育委員会 1980年 『高宮廃寺発掘調査概要報告』寝屋川市文化財資料 2

寝屋川市教育委員会 1985年 『高宮廃寺発掘調査概要報告』寝屋川市文化財資料 8

寝屋川市教育委員会 1986年 『高宮遺跡発掘調査概要報告』寝屋川市文化財資料 9

寝屋川市教育委員会 2003年 『太秦高塚古墳』

(財)大阪府文化財センター 2002年 『讃良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡・長尾窯跡群、長尾東地区』一般国道１号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第77集

(財)大阪府文化財センター 2003年 a 『大尾遺跡』一般国道１号バイパス(大阪北道路)建設に伴う小路遺跡発掘調査報告書 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第92集

(財)大阪府文化財センター 2003年 b 『門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区』一般国道１号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第93集

(財)大阪府文化財センター 2003年 c 『讃良郡条里遺跡(その２)』第二京阪道路(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第98集

(財)大阪府文化財センター 2003年 d 『太秦古墳群』一般国道１号バイパス(大阪北道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第99集

(財)大阪府文化財センター 2003年 e 『讃良郡条里遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、倉治遺跡、津田城遺跡』一般国道１号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第101集

(財)大阪府文化財センター 2004年 a 『讃良郡条里遺跡(その１)』一般国道１号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第109集

(財)大阪府文化財センター 2004年 b 『高宮遺跡(その２)』一般国道１号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第112集

(財)大阪府文化財センター 2004年 c 『小路遺跡(その３)』一般国道１号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う発掘調査報告書 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第113集

(財)大阪府文化財センター 2004年 d 『讃良郡条里遺跡(その３)』一般国道１号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第114集

(財)大阪府文化財センター 2004年 e 『高宮遺跡－遺構編－』一般国道１号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第115集

(財)大阪府文化財センター 2003年 『讃良郡条里遺跡(その４)現地公開資料』

(財)大阪府文化財センター 2003年 『太秦遺跡現地公開資料』

(財)大阪府文化財センター 2004年 『太秦遺跡現地公開資料』

(財)大阪府文化財センター 2004年 『奥山遺跡(奥山１号墳)現地公開資料』

瀬川芳則・中尾芳治 1983年 『日本の古代遺跡11 大阪中部』 保育社

市本芳三 2004年「太秦遺跡の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会 (第49回)資料』 (財)大阪府文化財センター

第３章　調査成果

第１節　調査成果の概要

調査区の旧地形(地山上面)および検出した遺構を概観すると、遺構検出面である地山上面は、丘陵部では調査区内北西端の標高が最も高く(約45.3m)、南東端(約43.5m)、南西端(約43.0m)へ向かって緩傾斜を呈する。X=－137,930付近では南へ下がる緩傾斜(比高差約１m)が、Y=－32,710付近では西へ下がる段差(比高差約0.4m)があるが、後者は近世以降の耕作に伴う境界を示すものであろうと考えている。丘陵部南西端からは南西へ向かい谷地形となる。谷は肩口から急激に下がり、谷底面の最も低位の箇所では約37.9mあり、比高差は約５mに達する。丘陵南西端付近では、古代の柵、古代から中世の整地土層・溝などの遺構を検出しており、古代の丘陵および谷地形は比較的旧地形をとどめていると考えられる。

一方、丘陵南部は北部の標高に比べると約２m下がり平坦面を呈するが、丘陵南部南端(谷東肩口)部を除けば古代から中世の遺構は皆無であること、谷地形を造成する際の現代盛土に当該地の地山土層が使用された蓋然性が高いことなどから、丘陵南部は削平を受けた可能性が高い。

図５　地山面等高線図(１：800)

発掘調査を進めるにあたり、現況の地形および排土場所の確保などを考慮し、調査対象地を１区(谷地形・丘陵端)と２区(丘陵部)に分けた。遺構の大半は地山上面で検出し、１区では古代から中世に至る谷地形を、２区では弥生時代から古代に至る竪穴住居や建物群などを検出した。

第２節　基本層序

１　１区

１区は近年まで宅地として利用されていた。宅地化に際し凹凸のある旧地表面上に盛土を施しており(図６－１・２地点)、現地表面はほぼ平坦面を呈する。１区南東半は現地表面から深さ0.2～0.3mで地山面となる。現地表面上に露呈する既存建物の基礎などは、地山面下にまで及ぶ。一方、西半は谷地形を呈しており、盛土層は厚さ0.3～0.6m、盛土層下の南西半は近代以降の湿地状堆積土層および耕作土層となる。北東半の盛土層下は近世の耕作土層となる。近世の耕作土層下の基本層序については、大半が７谷に該当することから７谷の項目で概要を加える。

２　２区

２区の基本層序は地点によって異なるが、上層から現代盛土層(近代以降の耕作土層含む)が厚さ0.05m～0.5m、近世の耕作土層が厚さ0.05m～0.1m堆積する。近世の耕作土層は(図６－６・７地点)など２区北半で堆積を確認できるが、その他の地点では地山上面まで現代盛土層が堆積しており、近代以降に削平を受けたと考えられる。近世の耕作土層下は原則として地山となるが、谷地形の肩口付近(図６－３地点)を中心とした北東－南西方向約26m間、北西－南東方向約46m間には厚さ0.1～0.25m程の古代整地土層が堆積する。この整地土層上面で古代の柱穴を検出した。

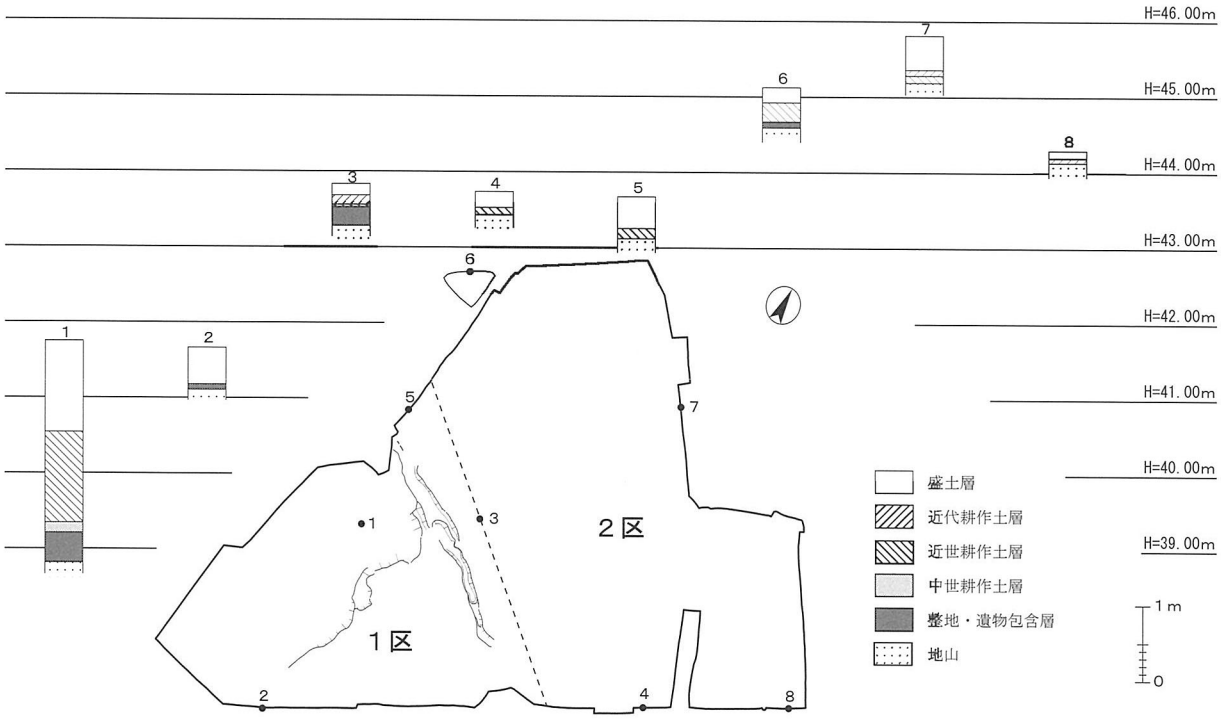


図６　調査区断面柱状模式図(高さ１：100)

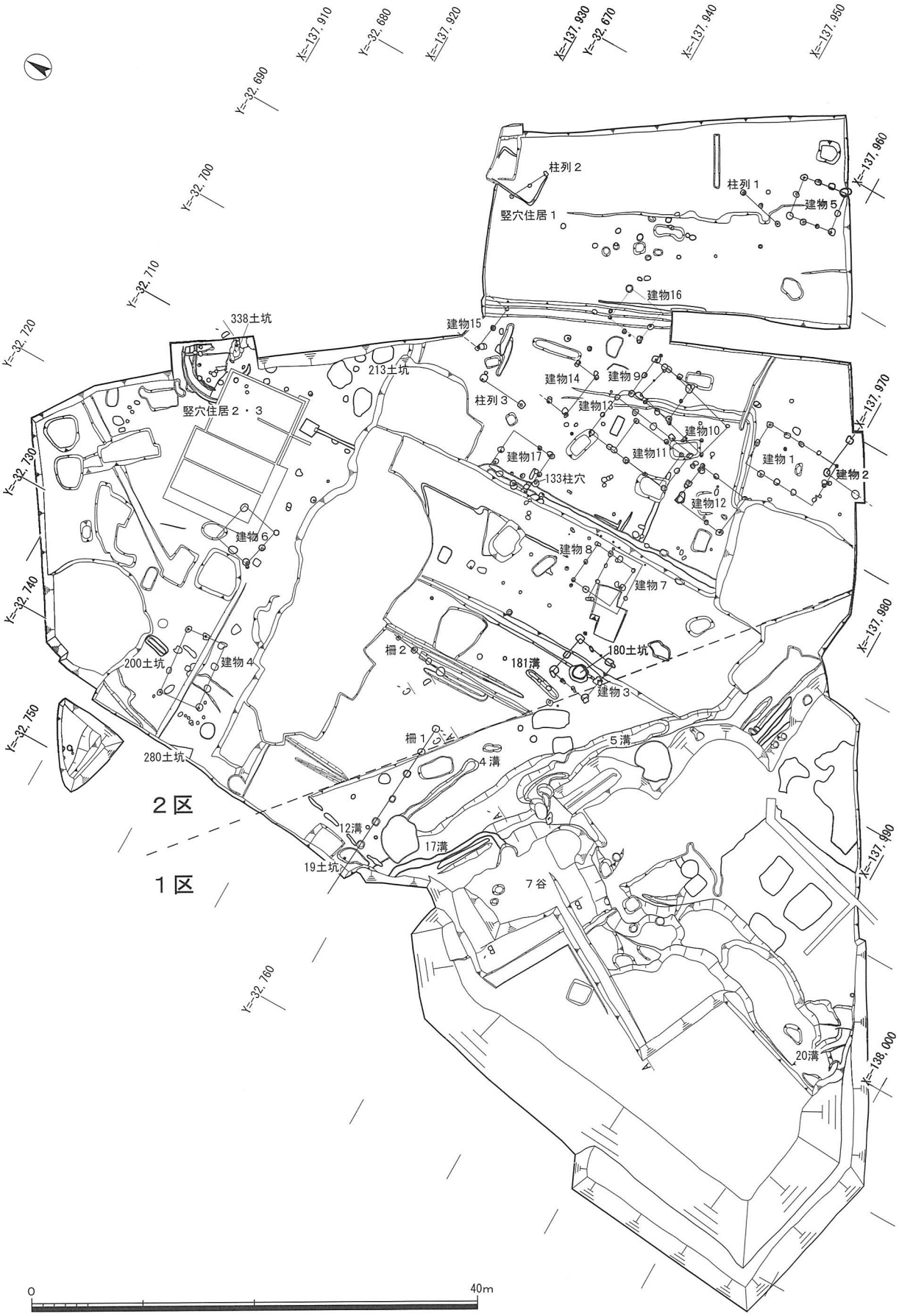


図７　調査区平面図（１：500）

第３節　遺構

調査の結果、１区では谷を検出し、古代の遺物を包含する堆積土層、中世の遺物を包含する堆積土層・耕作土層、近世の遺物を包含する耕作土層を、谷の東肩口では古代の遺物包含層、溝などを検出した。１区の谷肩口から２区の丘陵部では、弥生時代中期の竪穴住居、古代の竪穴住居・掘立柱建物・柵・土坑・溝・整地土層、中世の溝・耕作土層、近世の溝・耕作土層などを検出した。次に時代ごとに遺構の概説を行う。

１　弥生時代の遺構

２区北東部の丘陵東斜面際で弥生時代中期に属する竪穴住居を２棟重複した状態で検出した。

竪穴住居２・３(図８－１)　既存の建物の基礎などで南半部の大半が削平を受け、当初は壁溝、主柱穴と考えられるピット、床を形成する目的の土層と考えられる土層などの一部を検出したに過ぎない。調査をすすめる中で２重に巡る壁溝を検出し、竪穴住居が同位置で重複した状態にあることが判明した。竪穴住居の東側は調査区外に広がっており、調査対象地際まで幅２m程度拡張した。結果、竪穴住居復元全形の約４分の１を検出した。

竪穴住居２は平面形が円形を呈し、検出面での規模は径約6.2mに復元できる。竪穴住居２に伴う床用入れ土(炭・焼土含む)と考えられる土層は厚さ0.05m遺存していた。壁溝(311溝)は床を形成する目的の土層上面で検出し、幅約0.3m・深さ約0.1mある。主柱穴は検出位置から竪穴住居２に伴うと考えられるものが２基(304・334柱穴)ある。主柱穴の平面形は円形を呈し、検出面での規模は、径0.35～0.42m、深さ0.5～0.65mある。２基とも柱穴の埋土下半部には柱当たりに想定できる土層が遺存しており、底面での径は0.1～0.16mある。

竪穴住居３は竪穴住居２にほぼ重複する位置で検出した。平面形は円形を呈し、検出面での規模は復元径約7.6mある。壁溝(310溝)は幅約0.3m、深さ約0.1mある。主柱穴は検出位置から竪穴住居３に伴うと考えられるものが１基(308柱穴)ある。主柱穴の平面形は円形を呈し、検出面での規模は、径0.42m、深さ0.65m、柱当たりの径は0.1mある。308柱穴は竪穴住居２の壁溝上面で検出しており、重複状況から竪穴住居３は竪穴住居２の平面規模の拡大を目的とした建て替え住居と考えることができる。

338土坑(図８－１)　竪穴住居２・３内の南東寄りで検出した。竪穴住居２・３のどちらかに帰属する土坑であろうが、層位的には不明である。平面形は東西に長いやや歪な楕円形を呈し、東肩口は近代以降の掘り込みにより攪乱を受ける。検出面での現存規模は長さ約2.1m、幅約1.2m、深さ約0.3mある。底面には炭層が厚さ0.07m堆積し炉と考えられるが、壁面・底面とも熱を受けた痕跡はない。炭層上面に密着した状態で弥生時代中期に属すると考えられる甕(図21－１)が出土した。

２　古代の遺構

古代の遺構は丘陵部・谷地形で検出した。２区では、東端部の丘陵東斜面際に竪穴住居１棟・土坑１基、丘陵上に掘立柱建物17棟・柵２条・柱列３条・土坑３基・溝３条・整地土層１箇所などがある。１区では、土坑１基・溝１条・谷１箇所がある。

竪穴住居１(図８－２)　２区東端中央部の斜面際で検出した竪穴住居である。検出時は壁溝が調査区外に延長しており、北部および東部の一部を拡張した結果、ほぼ全形を検出することができた。遺存する箇所では壁溝が巡る。覆土は遺存している箇所では厚さ約0.3mあるが、竪穴住居の上面の大半は竹林によって攪乱を受け遺存状況は良好ではない。主軸方向はほぼ南北方向を示す。平面形は南北に長

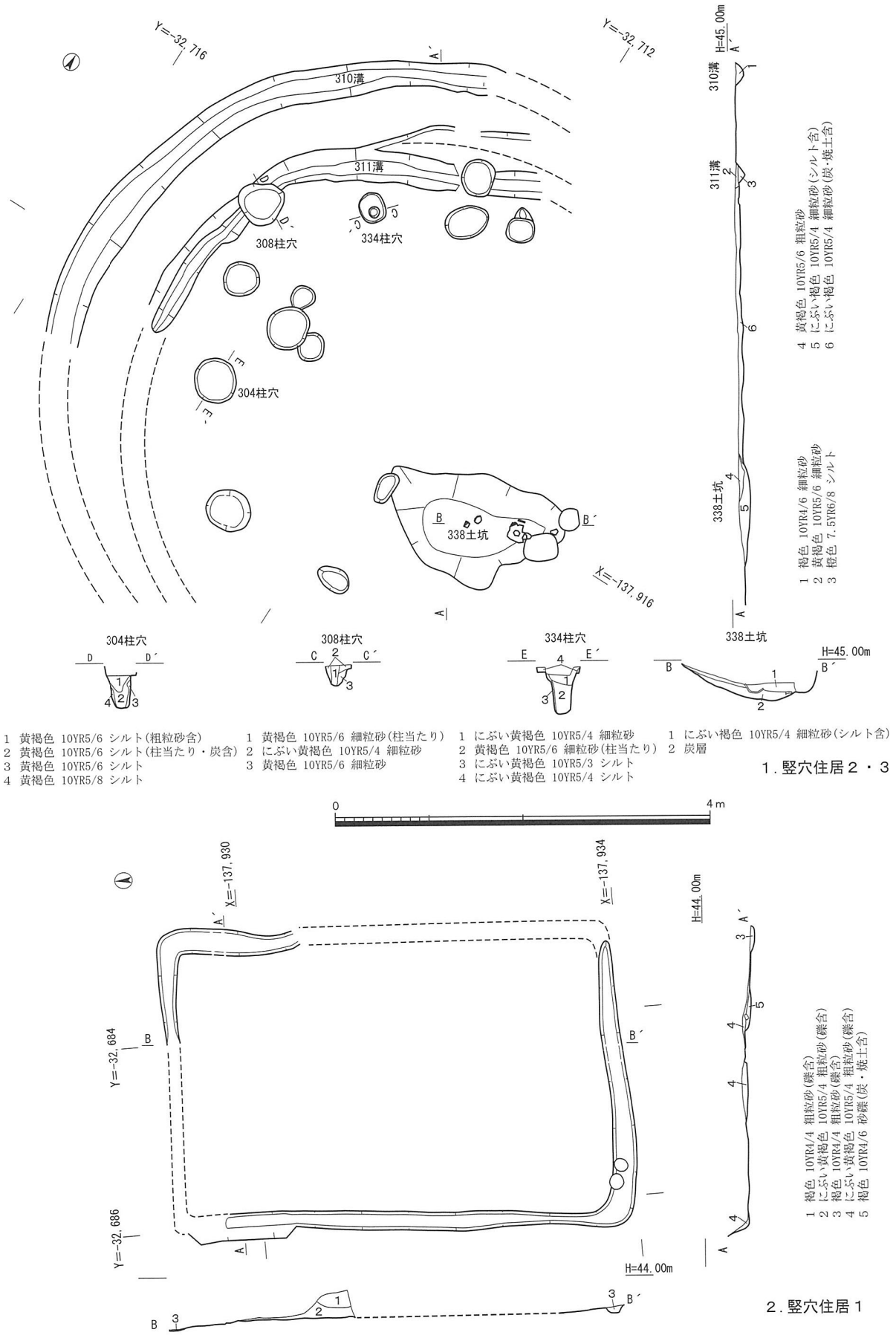


図８　竪穴住居１～３実測図（１：60）

い長方形を呈し、検出面での規模は、東西約3.0m、南北約4.9m、深さ約0.3mある。壁溝は幅0.2～0.25m、深さ0.02～0.2mある。床面は南西隅部に僅かに遺存していた。北東部には炭と焼土の分布する箇所があるが、竈は検出していない。南西隅部の壁溝内で小型の土師器甕が２個体(図21－４・５)正立した状態で出土し、甕中に小型土器(図21－６)が遺存していた。主柱穴は検出していない。

建物１(図９－１)　丘陵南部で検出した梁行２間(約4.2m)・桁行４間(約7.2m)の南北棟掘立柱建物である。北西隅柱および南西隅柱は削平を受けており検出していない。主軸方向は座標北に対し約３度東へ振れる。柱間は梁行が2.15mの等間、桁行は北側３間が約1.7mの等間であるが、南１間は約2.0mある。柱穴は平面形が方形ないし多角形を呈し、検出面での規模は一辺0.2～0.6m、深さ0.1～0.3mあるが、妻側中央柱穴は他の柱穴に比べると浅い。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.1～0.2mある。

建物２(図９－２)　丘陵南端で検出した掘立柱建物である。建物１の南東隅部が建物２の範囲と重複する位置にあるが、柱穴相互の重複状態はない。大半は南調査区外にあり、僅かに北西隅部を検出したに過ぎない。東西１間(約3.5m)、南北１間(約3.2m)ある。主軸方向は不明であるが、南北方向の柱列は座標北に対し約６度東へ振れる。柱穴は平面形が方形ないし多角形を呈し、検出面での規模は、一辺0.6～0.7m、深さ0.06～0.1mある。柱穴の平面規模は、建物の中では相対的に大きい。

建物３(図10－１)　丘陵南西部で検出した梁行２間(約3.9m)・桁行３間(約3.8m)の南北棟掘立柱建物であるが、桁行の柱間が狭いため建物の平面形はほぼ正方形を呈する。主軸方向は座標北に対し約９度東へ振れる。柱間は梁行が1.95mの等間、桁行は北２間が約1.2m・南１間が約1.4mある。柱穴は平面形が方形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、一辺0.32～0.8m、深さ0.06～0.4mある。桁行の内側柱穴は他の柱穴に比べると小規模で、相対的に浅い。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.1～0.25mある。大半の柱穴にはやや小規模な柱穴が重複する状態で遺存する。主柱に付属する添え柱に想定できると考えている。北妻側の中央柱穴(179柱穴)から格子タタキを有する平瓦(図23－43)が出土した。なお、建物の中央で土坑(180土坑)、桁行西柱筋に沿って溝(181溝)を検出した。遺物は出土せず重複状態にもないことから建物３と並存するかは不明であるが、建物を含めた古代の遺構が近接した位置に存在しないため、建物３と関連する可能性も指摘できる。180土坑・181溝については後述する。

建物４(図10－２)　丘陵北西部で検出した梁行２間(約3.7m)・桁行３間(約6.2m)の東西棟掘立柱建物である。主軸方向は座標東に対し約６度北へ振れる。西妻側の中央柱穴は攪乱を受ける。柱間は梁行が北１間1.75m、南１間約2.0m、桁行が2.0～2.1mある。柱穴は平面形が方形ないし多角形を呈し、検出面での規模は、一辺0.4～0.6m、深さ0.15～0.35mある。深さは柱穴によりばらつきがある。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.1～0.2mある。

建物５(図11－１)　丘陵東部斜面際で検出した梁行２間(約3.7m)・桁行３間(約4.0m)の南北棟掘立柱建物である。主軸方向は座標北に対し約10度西へ振れる。柱間は梁行が1.85mの等間、桁行は北２間が約1.3m、南１間が約1.4mある。柱穴は平面形が方形ないし多角形を呈し、検出面での規模は、一辺0.4～0.6m、深さ0.1～0.35mある。深さは柱穴によりばらつきがあり、桁行の中央２箇所の柱穴は浅い。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し、径0.1～0.2m、深さ0.1～0.52mある。建物の平面規模は建物３とほぼ同規模である。

建物６(図11－２)　建物４の東部で検出した東西２間(約3.8m)・南北２間(約3.6m)の掘立柱建物

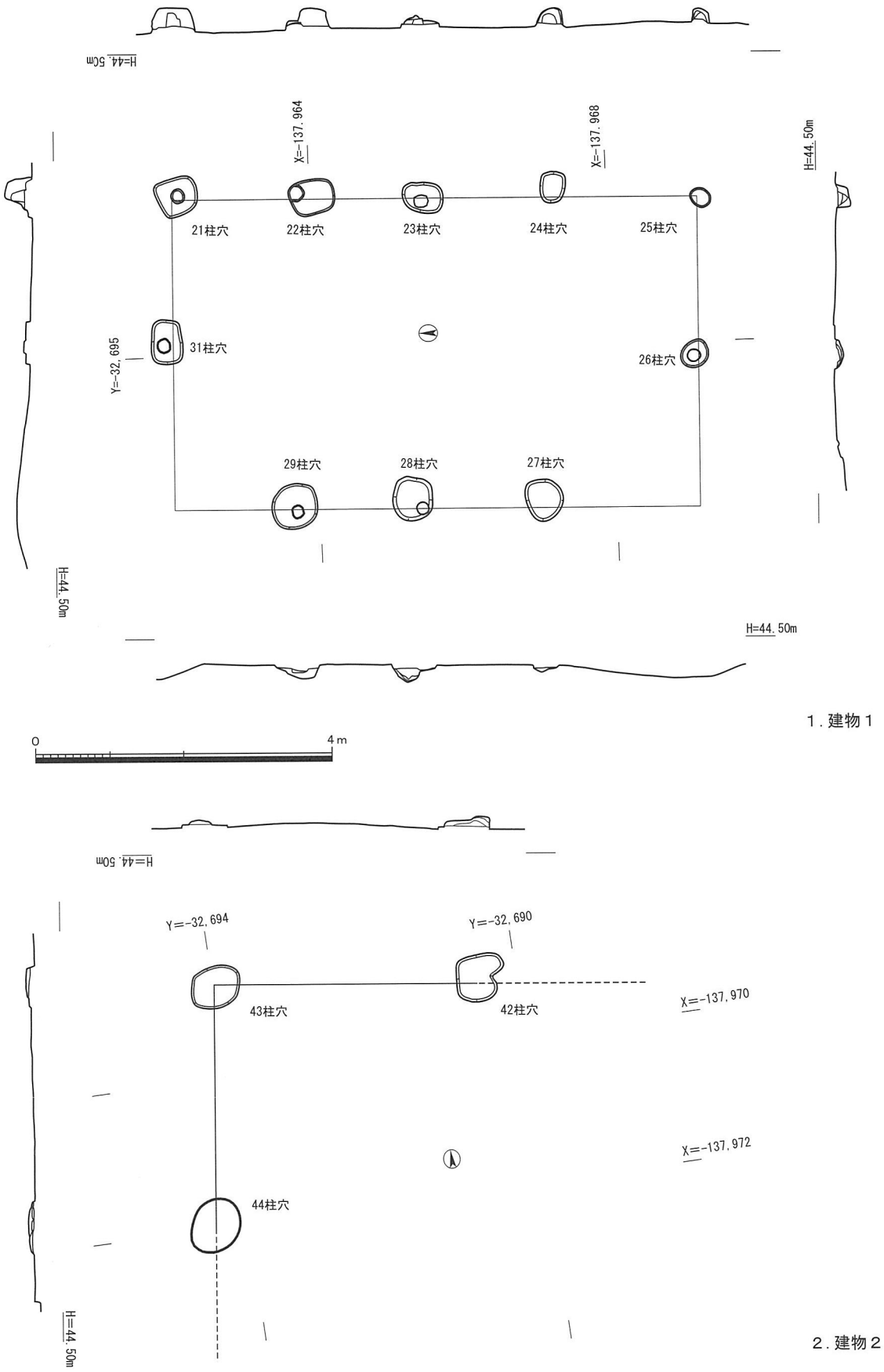
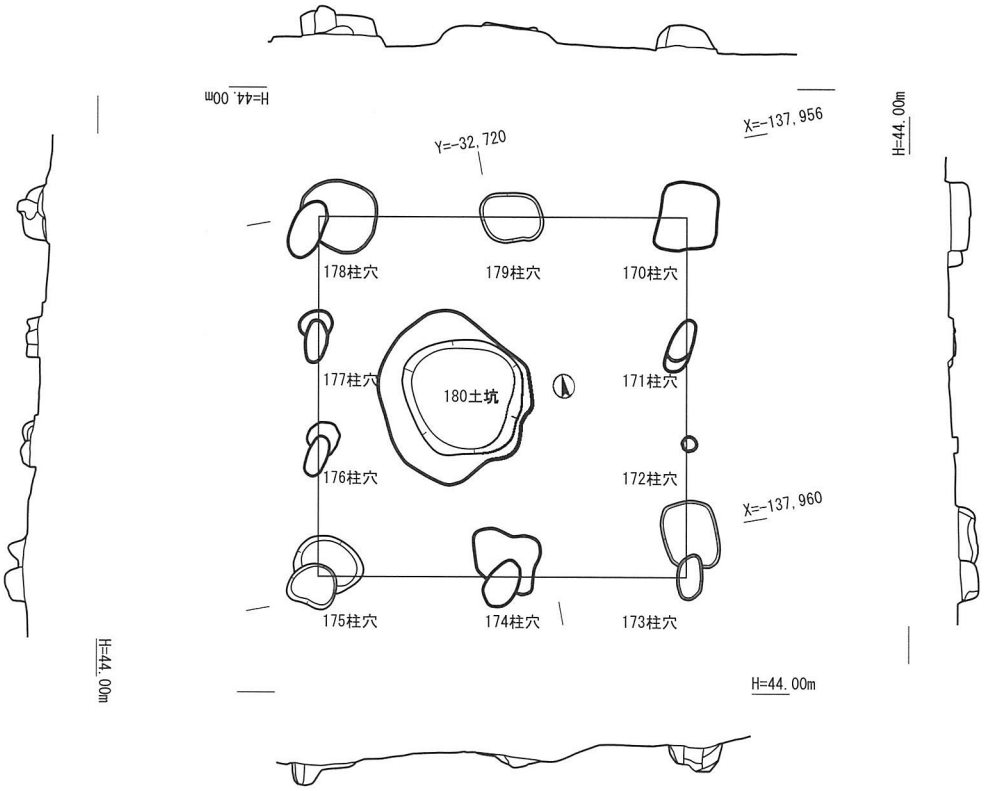
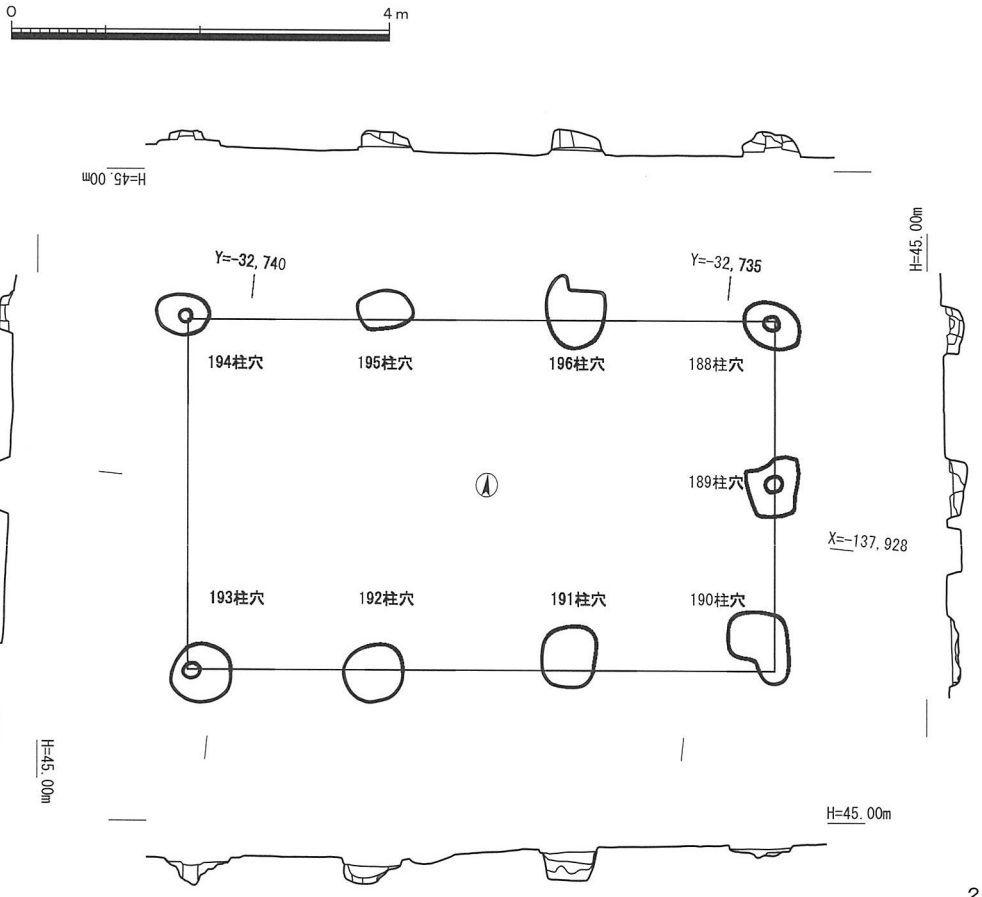


図９　建物１・２実測図（１：80）

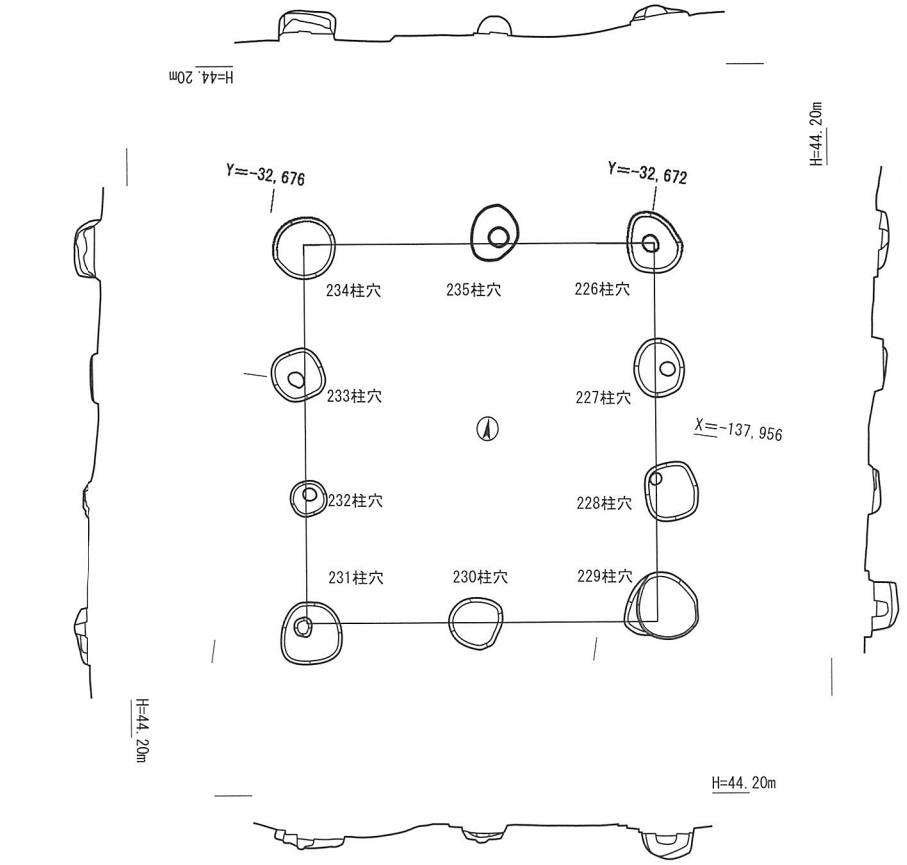


1．建物３

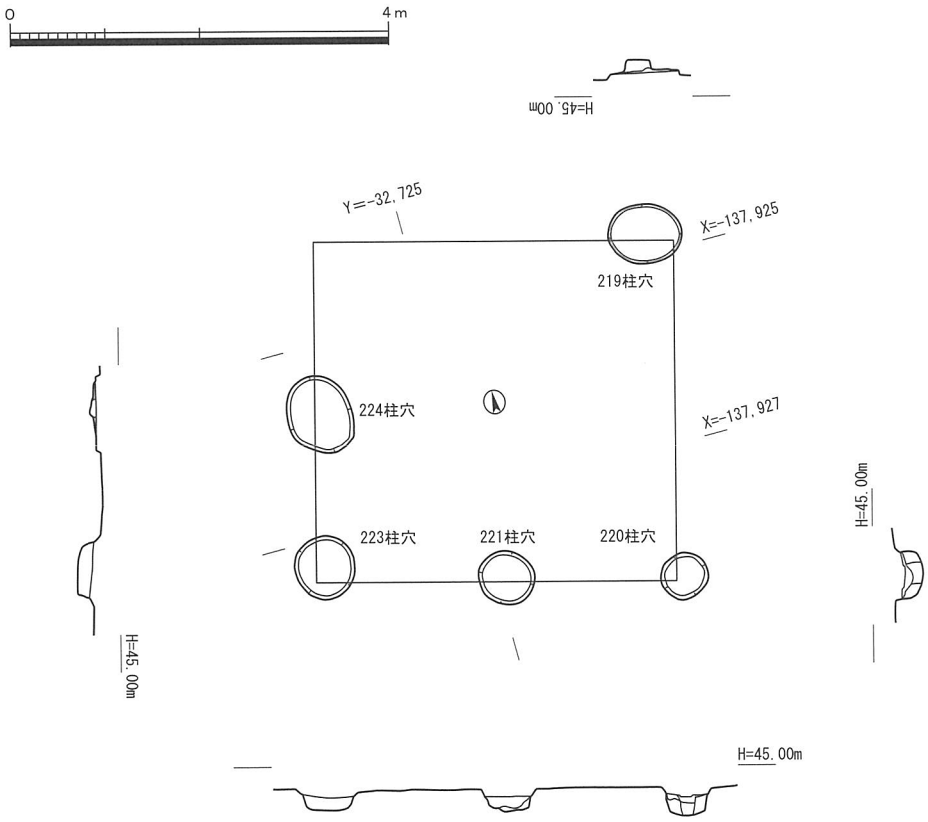


2．建物４

図10　建物３・４実測図（１：80）

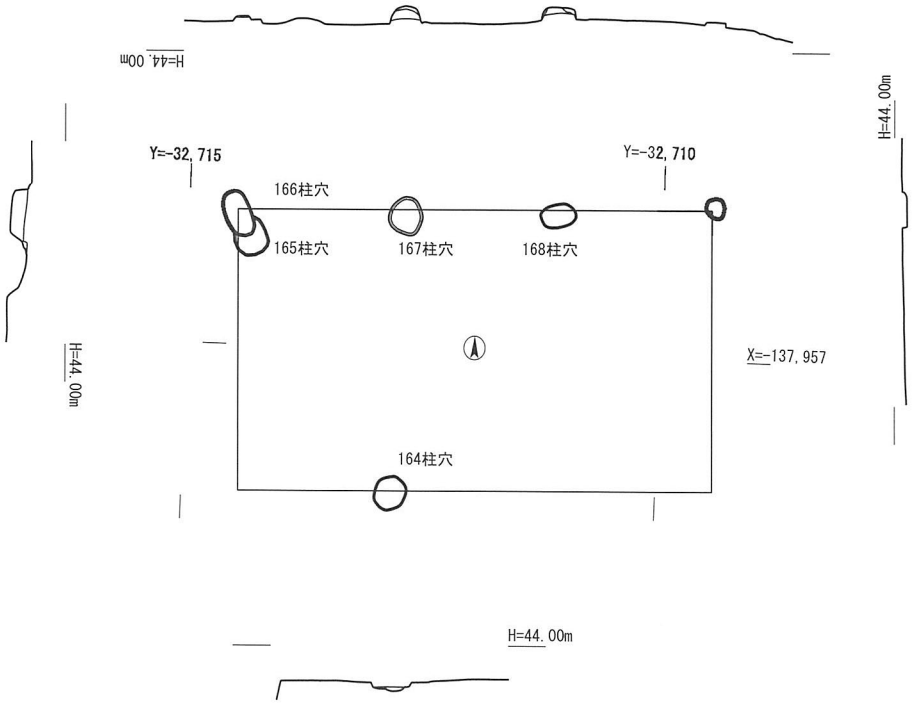


1．建物５

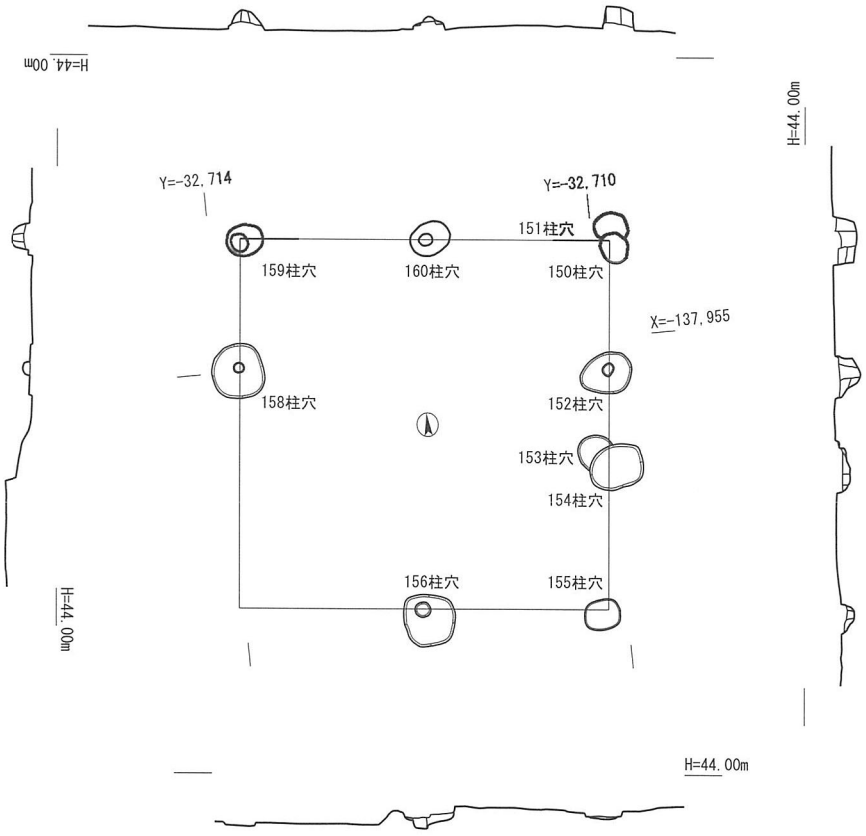


2．建物６

図11　建物５・６実測図（１：80）



1．建物７



2．建物８

図12　建物７・８実測図（１：80）

である。中央部は既存建物の基礎により削平を受けているため、構造は不明であるが、総柱建物の可能性がある。主軸方向は座標北に対し約13度東へ振れる。柱間は東西が約1.9mの等間、南北が約1.7mの等間である。柱穴は平面形が方形ないし多角形を呈し、検出面での規模は、一辺0.4～0.7m、深さ0.1～0.3mある。深さは柱穴によりばらつきがあり、西側中央の柱穴は浅い。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.2～0.25mある。

建物７（図12－１）　建物３の東部で検出した梁行１間分（約3.0m）・桁行３間（約5.0m）の東西棟掘立柱建物である。桁行南柱列は上面が削平を受けたものと考えられ、きわめて浅い柱穴を１基検出したにとどまる。主軸方向は座標東に対し約２度北へ振れる。桁行の柱間は中央間が１間約1.6m、他は約1.7mある。柱穴は平面形が円形を呈し、検出面での規模は、径0.2～0.4m、深さ0.05～0.23mある。柱当たりは検出していない。

建物８（図12－２）　建物７に重複した位置で検出したが、柱穴相互の重複がなく建物７との新旧状態は不明である。梁行２間（約3.9m）・桁行３間（約3.9m）の南北棟掘立柱建物である。主軸方向は座標北に対し約５度東へ振れる。桁行西側柱列の北から３・４基目は攪乱により削平を受ける。柱間は梁行が約1.9mの等間、桁行は中央間が１間約1.1m、他は約1.4mある。柱穴は平面形が方形ないし多角形を呈し、検出面での規模は、一辺0.4～0.6m、深さ0.1～0.3mある。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.15～0.2mある。建物の平面規模は建物３・５とほぼ同規模である。

建物９（図13－１）　建物１の北側で検出した、梁行２間（約3.6m）・桁行３間（約4.1m）の南北棟掘立柱建物である。主軸方向は座標北に対し約６度東へ振れる。柱間は梁行が約1.9mの等間、桁行は中央間が１間約1.3m、他は約1.4mある。柱穴は平面形が方形ないし多角形を呈し、検出面での規模は、一辺0.4～0.6m、深さ0.2～0.45mある。柱穴の深さはこの付近に位置する建物の中では深い。ただし、南妻中央柱穴は浅い。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.1～0.2mある。建物の平面規模は建物３・５・８とほぼ同規模である。

建物10（図13－２）　建物９に重複した位置で検出した梁行２間（約3.4m）・桁行４間（約7.6m）の南北棟掘立柱建物である。柱穴相互の重複状態から建物10が古い。主軸方向は座標北に対し約13度東へ振れる。西側桁行柱列の北から３基目と東側桁行柱列の北から２・４基目の柱穴は検出していない。柱間は梁行が1.75mの等間、桁行は北３間が約1.9m、南１間は約2.0mある。柱穴は平面形がほぼ方形を呈するが、規模はばらつきがある。検出面での規模は、一辺0.3～0.8m、深さ0.06～0.22mあり、柱穴の深さは全体に浅い。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.12～0.2mある。

建物11（図14－１）　建物10の西側で検出した梁行２間（約3.4m）・桁行３間（約5.1m）の南北棟掘立柱建物である。主軸方向は座標北に対し約７度東へ振れる。桁行東側柱列の北から２基目の柱穴は検出していない。柱間は梁行が約1.7mの等間、桁行は約1.7mある。柱穴は平面形がほぼ方形を呈し、検出面での規模は、一辺0.4～0.7m、深さ0.11～0.53mある。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.1～0.22mある。

建物12（図14－２）　建物11の南側で検出した梁行２間（約3.8m）・桁行３間（約4.8m）の南北棟掘立柱建物である。主軸方向は座標北に対し約７度東へ振れる。桁行西側柱列の北から２基目と、桁行の東側柱列の北から３基目の柱穴は検出していない。柱間は梁行が約1.9mの等間、桁行が1.65mの等間である。柱穴は平面形が方形ないし多角形を呈し、検出面での規模は、一辺0.36～0.62m、深さ0.14～0.46mある。深さは柱穴によりばらつきがあるが、この付近の建物と比較して深い。柱当たりの遺存す

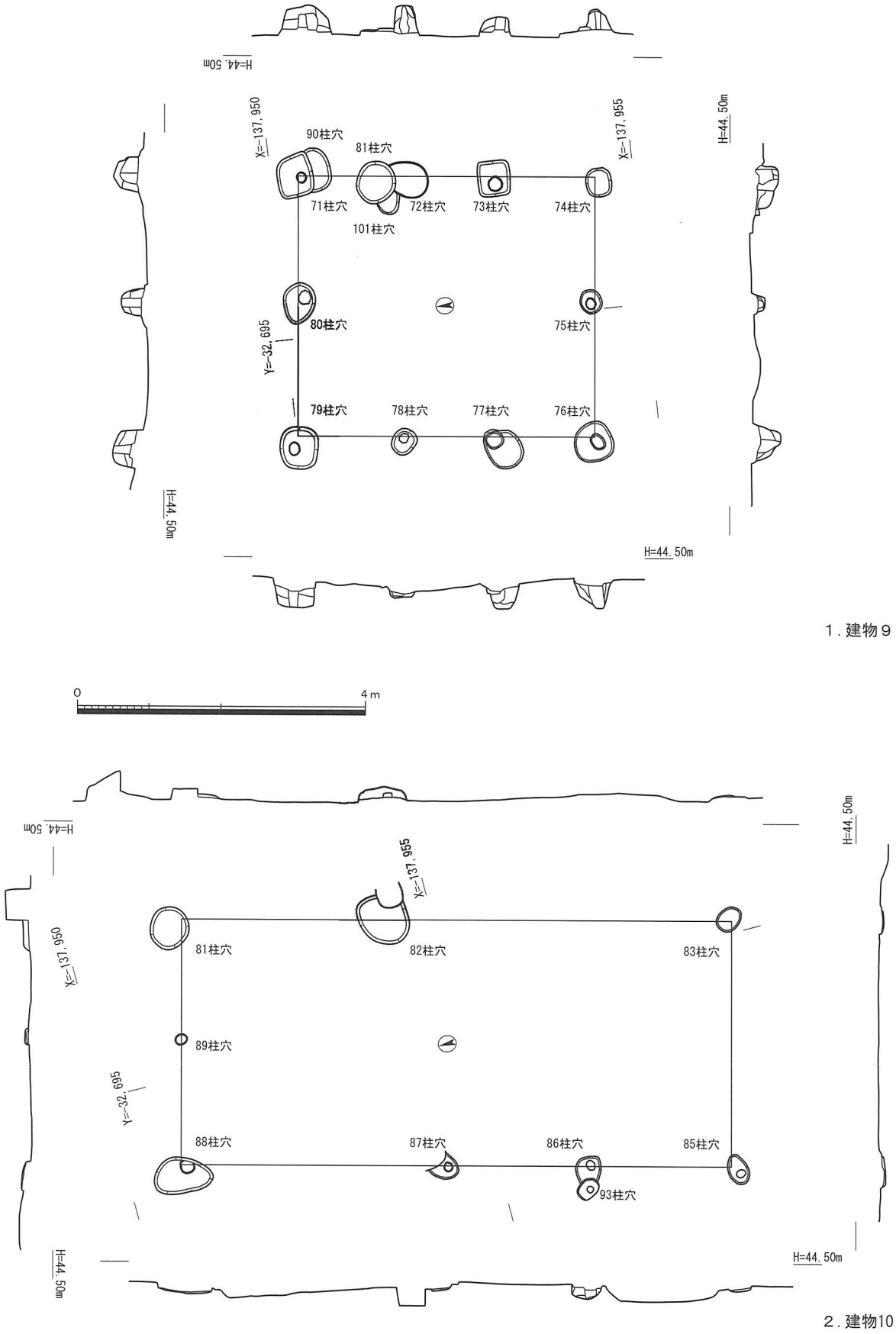
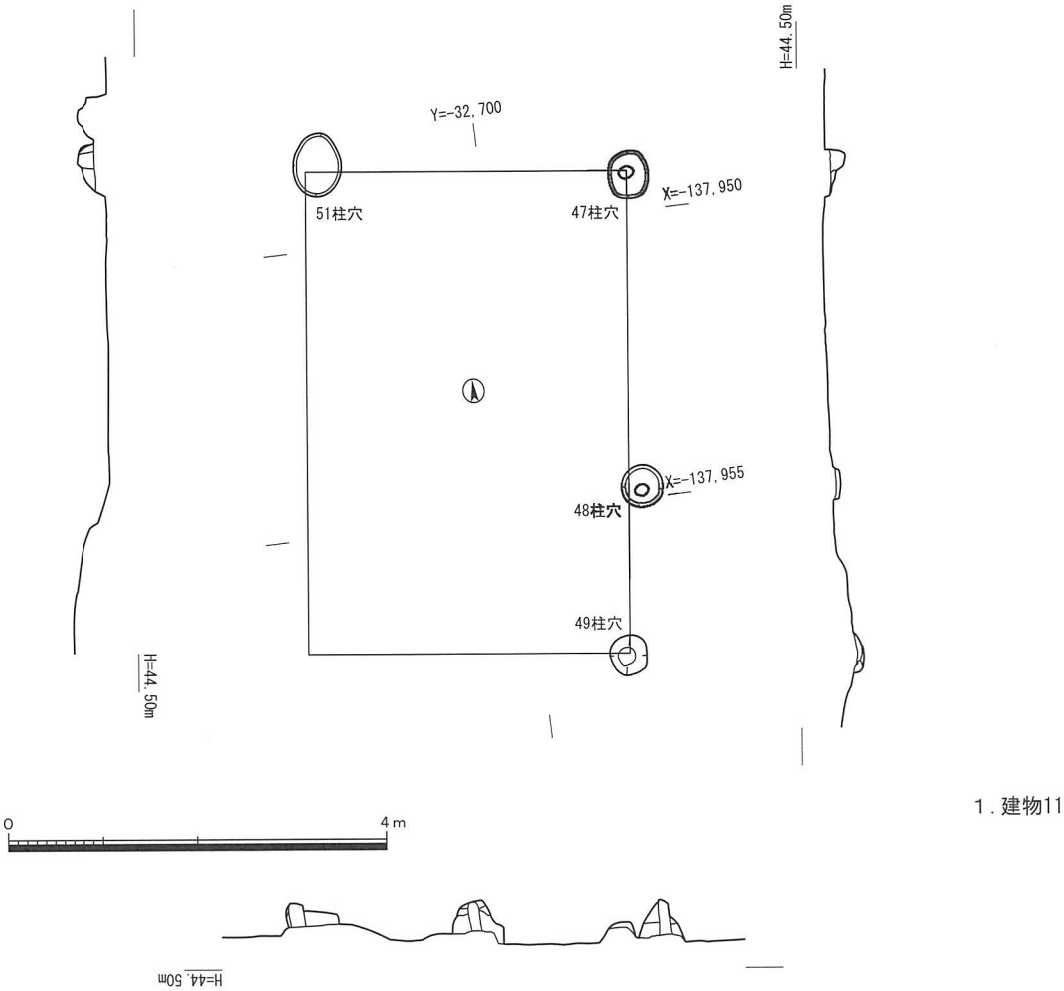


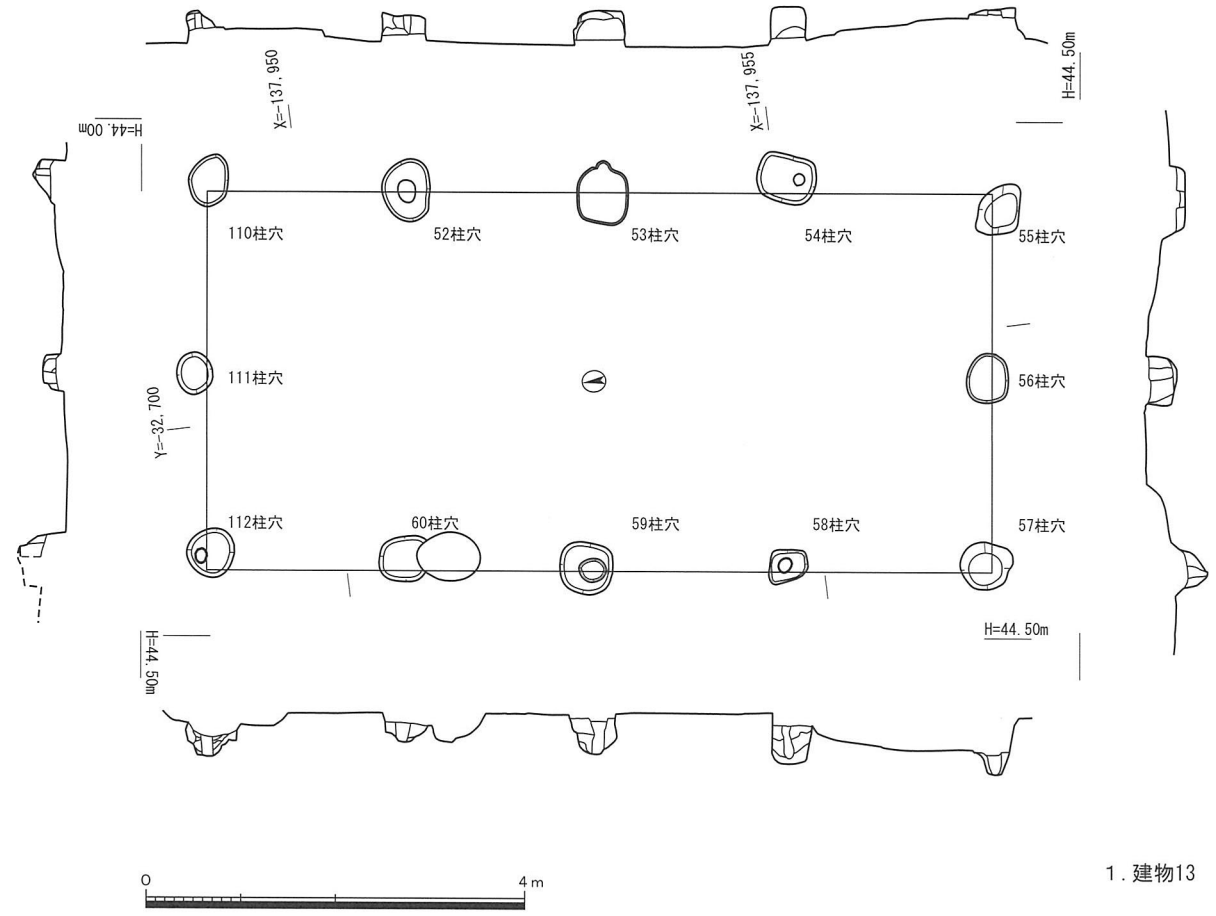
図13　建物９・10実測図（１：80）



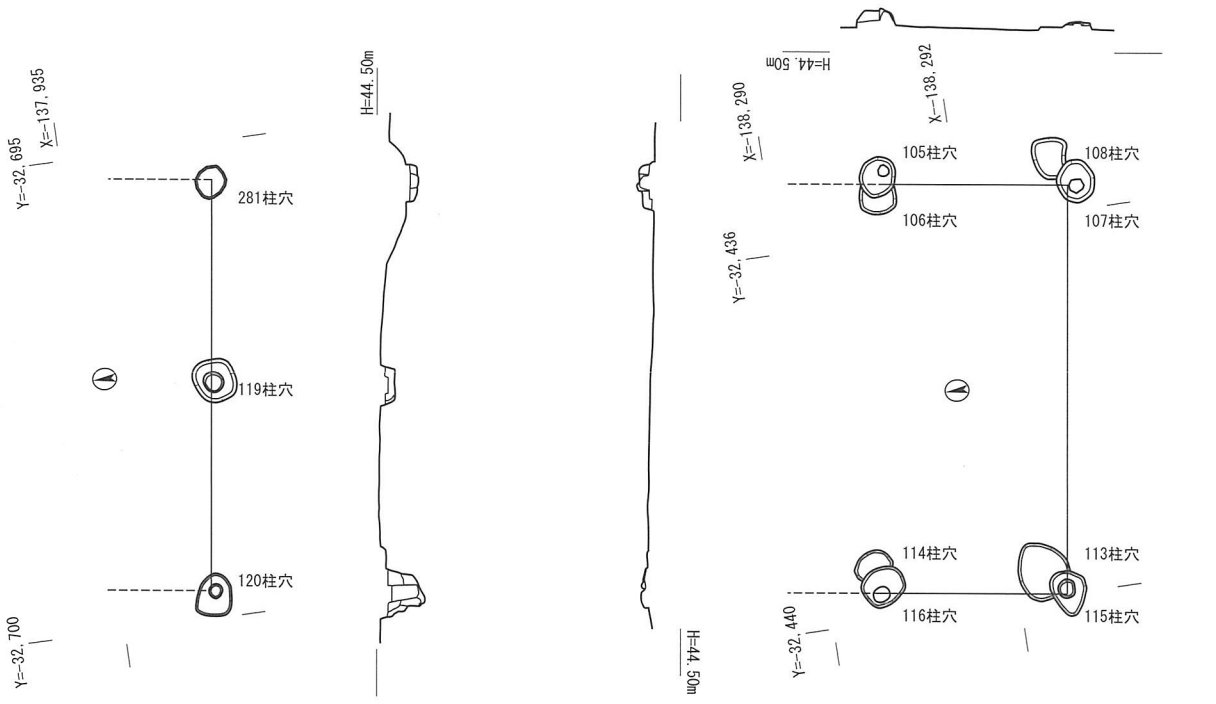
1．建物11

2．建物12

図14　建物11・12実測図（１：80）



1．建物13



3．建物15

2．建物14

図15　建物13～15実測図（1：80）

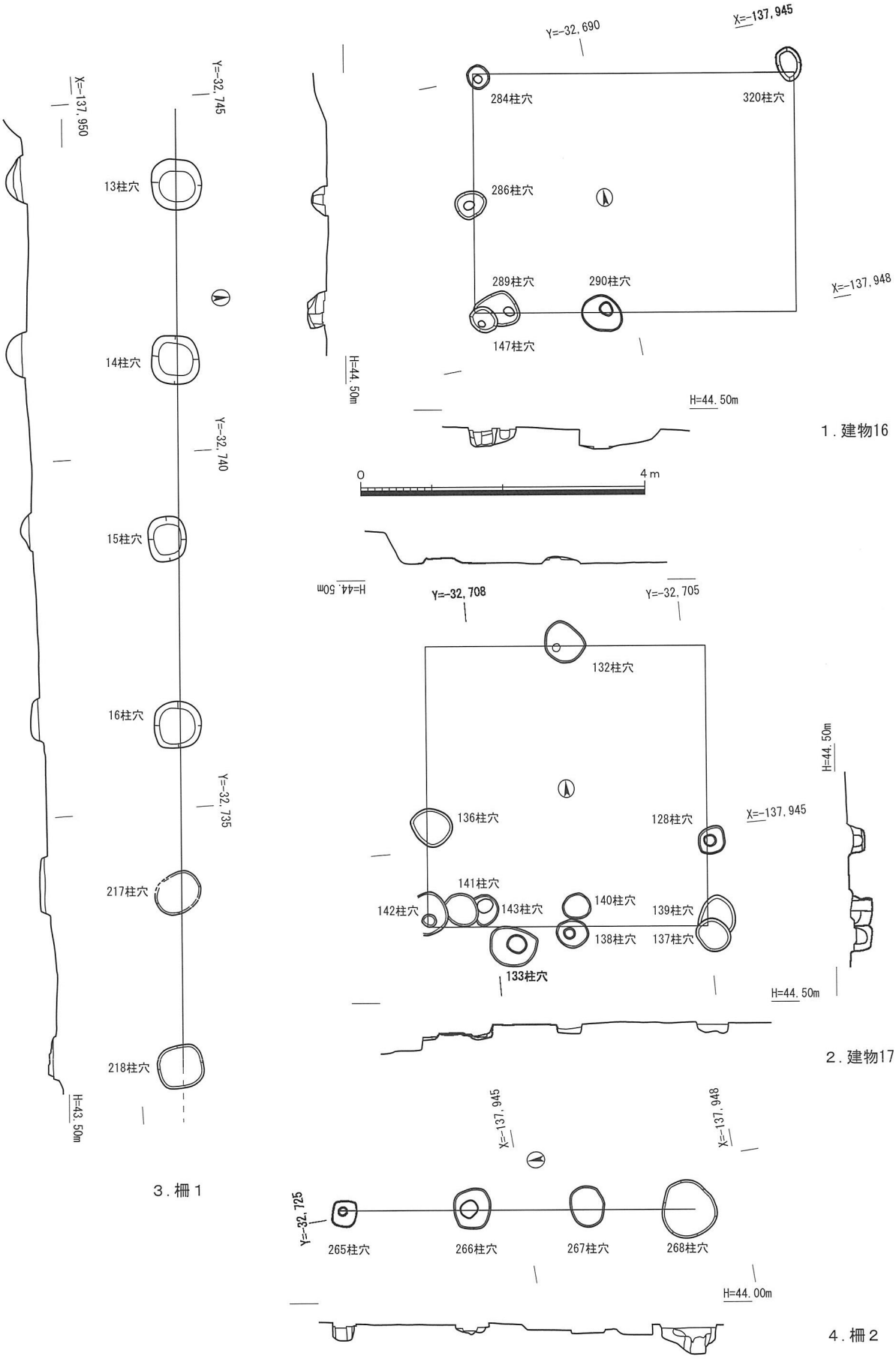


図16　建物16・17、柵１・２実測図（１：80）

る柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.1～0.18mある。

建 物13(図15－１)　建物11に重複した位置で検出した梁行２間(約4.0m)・桁行４間(約8.4m)の南北棟掘立柱建物である。北西隅の柱穴は建物11の柱穴と重複状況にあり、建物13が古い。主軸方向は座標北に対し約７度東へ振れる。柱間は梁行が約2.0mの等間、桁行は北１間が約2.2m、中央の２間が約2.0m、南１間が約2.2mある。柱穴は平面形が方形ないし多角形を呈し、検出面での規模は、一辺0.42～0.7m、深さ0.22～0.52mある。深さは柱穴によりばらつきがあるが、この付近の建物と比較して深い。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.1～0.16mある。

建 物14(図15－２)　建物13の北側で検出した東西１間(約4.4m)・南北１間(約2.0m)の掘立柱建物である。北延長には建物15とした柱穴列があり、南北方向を桁行とした場合、４間北へ延長すると建物15とした柱穴列に至り、桁行５間(約10.0m)の建物に復元することができるが、その間で柱穴を検出していないため、ここでは別の建物として復元した。主軸方向は座標北に対し約７度東へ振れる。南側柱列の中央柱穴想定位置には攪乱があり検出していない。柱穴は平面形がほぼ方形を呈し、検出面での規模は、一辺0.36～0.46m、深さ0.08～0.2mある。深さは柱穴によりばらつきがあるがこの付近の建物と比較すると浅い。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.1～0.2mある。

建 物15(図15－３)　建物14の北延長で検出した東西２間(約4.4m)の掘立柱列で、建物14と柱筋が通る。この柱列は南北棟掘立柱建物の南妻側柱列ないし建物14の北妻側柱列と考えられる。主軸方向は座標東に対し約７度南へ振れる。柱穴は平面形がほぼ方形を呈し、検出面での規模は、一辺0.4～0.5m、深さ0.15～0.45mある。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.17mある。

建 物16(図16－１)　建物14の東側で検出した東西３間(約4.5m)・南北２間(約3.4m)の掘立柱建物である。東西棟掘立柱建物と考えられるが、建物の東側は東へ向かって緩傾斜を呈しており、削平を受けたものと考えられ、他の柱穴は検出していない。主軸方向は座標東に対し約７度南へ振れる。柱穴は平面形がほぼ方形を呈し、検出面での規模は、一辺0.35～0.48m、深さ0.22～0.3mある。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.12～0.15mある。

建 物17(図16－２)　建物14の西側で検出した10数基の柱穴群のうち、建物としてまとまりが想定できる柱穴を建物17とした。梁行２間(約3.9m)・桁行３間(約3.9m)の南北棟掘立柱建物で、両桁行柱列は北側の２基の柱穴は検出していない。北妻側柱列は１基を検出したにとどまる。桁行の柱間が狭いため建物の平面形はほぼ方形を呈する。主軸方向は座標北に対し約５度東へ振れる。柱間は梁行が1.95mの等間、桁行は約1.3mの等間と考えられる。柱穴は平面形が方形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、一辺0.35～0.6m、深さ0.14～0.3mある。桁行の内側柱穴は規模が小規模で、相対的に浅い。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.14～0.2mある。建物の平面規模は建物３・５・８・９とほぼ同規模である。

なお、建物17の南側に接した位置で検出した133柱穴(図16－２)からは奈良時代に属する須恵器杯・甕(図21－９・10)が出土した。

柵 1(図16－３)　丘陵南端で検出した東西５間分(約12.4m)の掘立柱の柵で、柱間は１間2.4～2.6mある。主軸方向や柱間を考慮すると西側は平成13年度大尾遺跡で検出された柵(塀１)に連続すると考えられ、12間分を検出したことになる。主軸方向は座標東に対し約４度南へ振れる。柱穴は平面形がほぼ方形を呈し、検出面での規模は、一辺0.6～0.7m、深さ0.15～0.35mある。柱当たりは検出していない。

なお、丘陵南西端には古代の整地土層が広がっており、柵１の柱穴は整地土層上面で検出した。

柵２（図16－４）　柵１から約4.5m北東部で検出した南北３間分（約5.0m）の掘立柱の柵で、柱間は１間1.6～1.8mある。主軸方向は座標北に対し約８度東へ振れる。柱穴は平面形がほぼ方形を呈し、検出面での規模は、一辺0.35～0.75m、深さ0.05～0.4mある。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.16～0.2mある。

柱列１（図７）　建物５北側で検出した南北２間分（約4.2m）の掘立柱の柱穴列で、主軸方向は座標北に対し約７度東へ振れる。平面形がやや歪な方形を呈し、検出面での規模は、一辺0.38～0.48m、深さ0.05～0.1mある。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.15～0.22mある。

柱列２（図７）　竪穴住居１の上面で検出した東西２間分（約3.7m）の掘立柱の柱穴列で、主軸方向は座標東に対し約33度北へ振れる。柱穴は平面形が歪な方形を呈し、検出面での規模は、一辺0.3～0.42m、深さ0.1～0.12mある。

柱列３（図７）　建物14・15の西側で検出した南北１間分（約4.1m）の掘立柱の柱穴列で、主軸方向は座標北に対し約４度東へ振れる。柱穴は平面形が方形を呈し、検出面での規模は、一辺0.64～0.70m、深さ0.06～0.09mある。柱当たりの遺存する柱穴では、柱当たりの平面形は円形を呈し径0.16～0.23mある。

その他の柱穴　各地点で数十基にのぼる柱穴を検出したが、主軸方向や柱間にばらつきがあり建物としてはまとまらない。

19土坑（図17－５）　１区北西端で検出した土坑である。平面形は南北に長い歪な楕円形を呈し、検出面での規模は、長軸約2.7m、短軸約1.7m、深さ約0.3mある。土師器・須恵器壺（図21－７・８）が出土した。

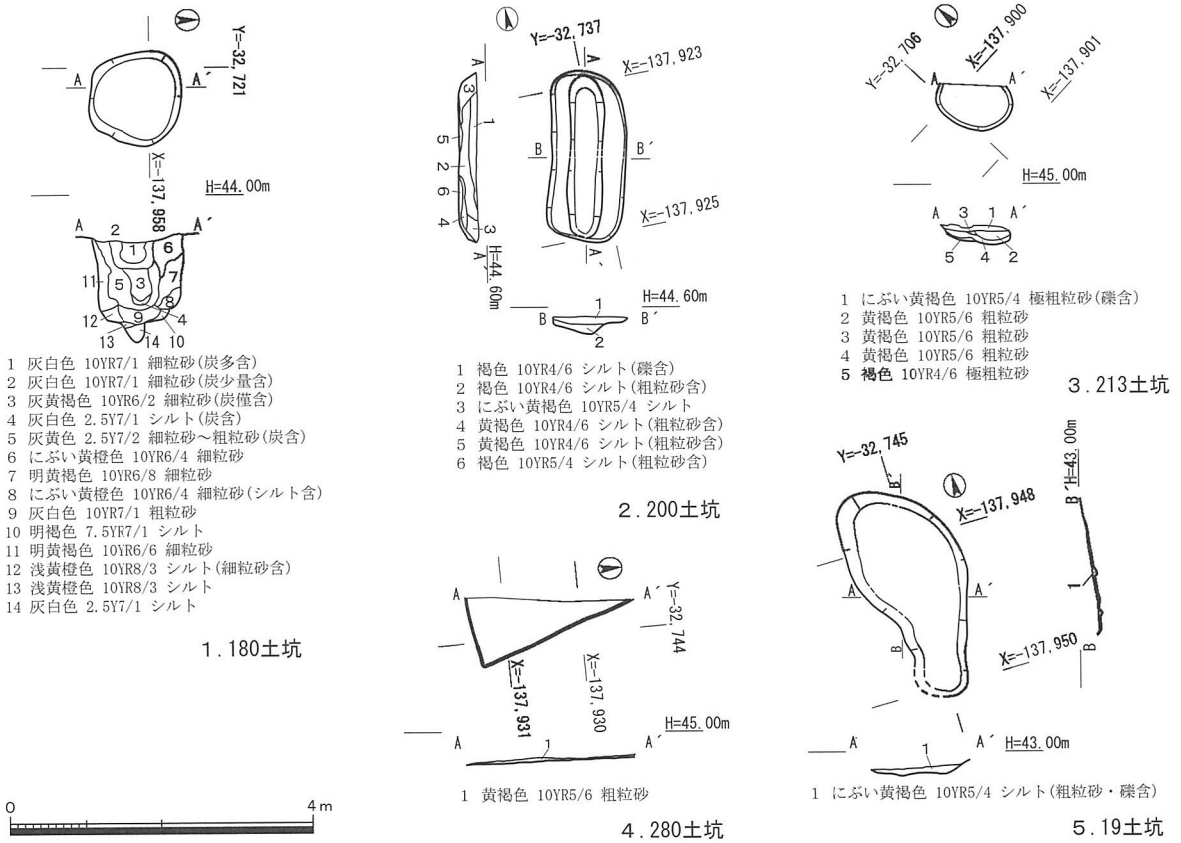


図17　19・180・200・213・280土坑実測図（1：100）

213土 坑(図17－３)　２区東端中央で検出した土坑で、東肩口部は調査区外に広がる。平面形は楕円形を呈し、検出面での規模は、北西－南東方向で長さ約1.0m、深さ0.13mある。遺物は土師器の小型甕(図21－３)が出土した。

280土 坑(図17－４)　２区北西端で検出した土坑で、大半は調査区外へ広がり南東隅部を検出したにとどまる。東辺・南辺とも直線的で、竪穴住居の形態を呈するが、壁溝などの施設はない。検出面での現存規模は、東辺約3.6m、南辺約1.0m、深さ0.05mある。遺物が出土せず時期は不明であるが、堆積土層は古代の遺構の土層に近似する。

180土 坑(図17－１)　建物３の範囲内で検出した土坑である。平面形は歪な楕円形を呈する。検出時には中央部に灰白色の土層が径約0.8mの平面形楕円形状に堆積していた。周囲には裏込め状を呈する灰黄褐色・明褐色の細粒砂などが堆積していたことから、井戸の可能性を想定し調査を進めた。検出面での規模は、掘形径1.6～1.9m、深さ約1.5mある。検出面から約1.1mの深さで段を有し、中央部は径約0.3mの断面擂鉢状に窪み底面に至る。中央部の灰白色細粒砂層は炭を多く包含し、底面にまで及ぶ。

灰黄褐色・明褐色細粒砂層を裏込めの土層に想定した場合、裏込めを支持する施設が不可欠であるが、灰白色細粒砂と灰黄褐色・明褐色細粒砂の境界に何らかの施設があった痕跡はない。また、検出位置は丘陵上であり、周囲の地山はシルトおよび細粒砂層であることから、常時湧水があるとは考えがたく、僅かな湧水を確保する目的の井戸、あるいは雨水溜めを含め水溜めのような施設も想定できるが、用途は不明である。なお、土坑のすべての土層から遺物が一片も出土していないことは、用途を考える上で手掛かりになろうか。時期は不明であるが、堆積土層は古代の遺構の土層に近似する。

200土 坑(図17－２)　建物４の北側で検出した土坑である。平面形は長楕円形を呈し、検出面での規模は、長軸約2.3m、短軸約1.0m、深さ0.28mある。遺物は出土せず時期は不明であるが、堆積土層は古代の遺構の土層に近似する。

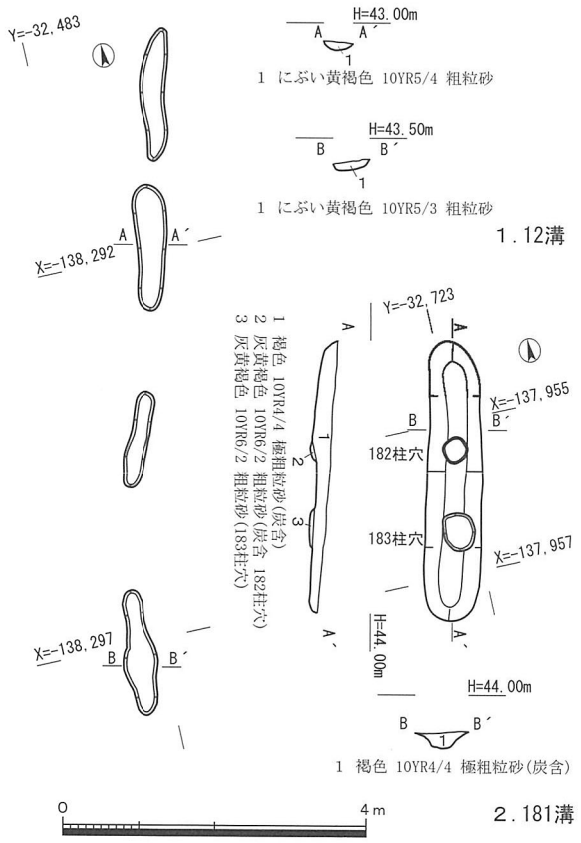


図18　12・181溝実測図(１:100)

４溝(図７)　７谷北肩口に近接する箇所で検出した東西方向に延長する溝で、東肩口は調査区内で立ち上がり、西は攪乱を受ける。攪乱以西は途切れ連続しない。主軸方向は座標北に対し約14度東へ振れる。検出面での規模は、現存長約8.3m、幅0.45～1.1m、深さ0.14～0.2mある。古代の土師器・須恵器の細片が出土した。

12溝(図18－１)　１区の丘陵北西端で検出した南北方向に延長する溝状遺構で、平面形はやや蛇行する。主軸方向は座標北に対し約14度東へ振れる。検出面での規模は、現存長約9.0m、幅0.3～0.45m、深さ約0.1mある。土師器細片が出土した。

20溝(図７)　１区南東隅で検出した北西－南東方向を示す溝状遺構である。西は攪乱を受け、東は調査区外へ延長する。検出面での規模は、現存長約3.0m、深さ約0.8mある。土師器細片が出土

したのみで時期は不明であるが、堆積土層は古代の遺構の土層に近似する。

181溝(図18－２)　建物３西側で検出した南北方向の溝状遺構で、主軸方向は座標北に対し約13度東へ振れる。平面形は南北に長い楕円形を呈し、検出面での規模は、長軸約3.7m、短軸約0.8m、深さ約0.4mある。溝底面で柱穴を２基検出した。土師器・須恵器細片が出土したのみで時期は不明であるが、堆積土層は古代の遺構の土層に近似する。

整地土層(図19－１)　２区丘陵南西部から１区７谷肩口にかけて検出した古代に属する堆積土層である。当該範囲は南西方向に向かって緩傾斜を呈しており、この傾斜地に対して平坦地を確保する目的の整地土層と考えている。整地土層の堆積する範囲は、北東－南西方向では約26m、北西－南東方向では約46mにおよび、厚さは0.1～0.4mある。先述したように、柵１の柱穴はこの整地土層上面で検出した。７世紀後半から８世紀の土師器・須恵器が出土した(図23－32～41)。

遺物包含層(図19－１)　１区７谷東肩口部で検出した古代に属すると考えられる遺物包含層で、平成13年度の確認調査(15トレンチ)で検出された土層に相当する。南・西部は攪乱を受ける。北東側では北東－南西方向では約2.3m、北西－南東方向では約3.4mの範囲に堆積し、検出面からの厚さは厚い箇所で約1.1mある。遺物は古代に属すると考えられる土師器の細片が出土した。また、この遺物包含層検出地点から約５m南東側でも同様の土質の遺物包含層を検出した。西部は攪乱を受ける。北東側では東西方向で約６m、北西－南東方向で約3.5mの範囲に堆積し、厚さは厚い箇所で0.1mある。遺物は須恵器(図22－23)が出土した。２区北端部でも古代の遺物包含層と考えられる土層の堆積を検出した。厚さは0.15mある。遺物は土師器の細片が出土したのみで時期は不明である。

７谷(図７・20)　１区西半で検出した谷である。谷底面は予想外に深度が深くまで達しており、安全を確保しつつ調査を進めたため底面までの調査面積は最小限にとどめた。古代の遺物包含層、中世の遺物包含層および耕作土層、近世の耕作土層などを確認した。ここでは古代から近世まで一括して概要を述べる。

谷は北端肩口ならびに東端肩口を検出した。西端肩口は調査区外へ広がり、検出していないが、平成13年度調査では調査対象地東辺部まで遺構が検出されていることから、今回の調査対象地に西接する現在の市道直下に位置すると考えられる。従って、７谷の肩口は１区の調査区外で変化点を有し、ほぼ直角に南へ折れ曲がって直線的に南方向へ延長する蓋然性が高いと考えられる。検出した谷の平面形は、各辺は概して直線的で直角ないしは鈎形に曲折する形状が想定できる。

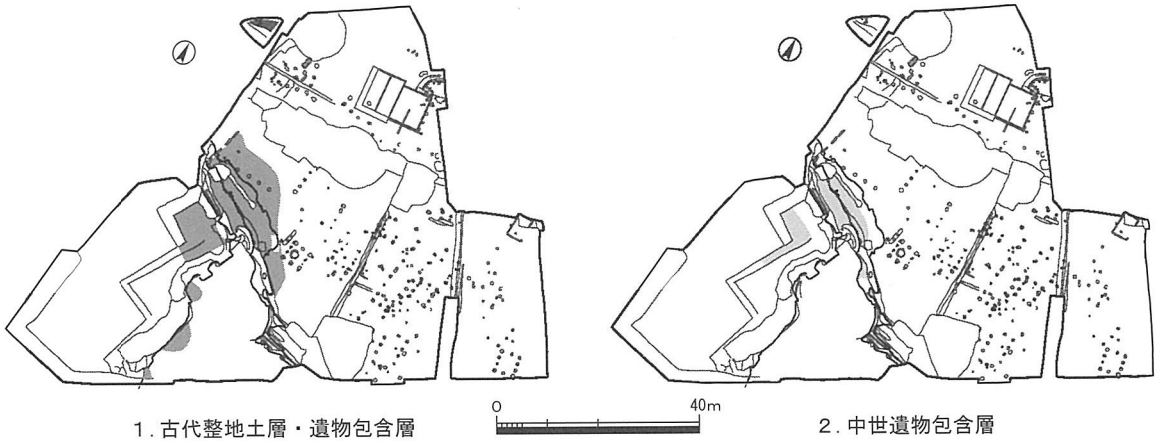


図19　整地土層・遺物包含層分布図(１:1,500)

図20　7谷および丘陵部断面図（1：100）

検出面での規模は、１区北端から約７ｍで谷の北肩口(古代整地土層の途切れる箇所)となる。北肩口から約４ｍで谷底面に至り、肩口から底面の比高差は約3.3ｍある。谷底面は検出した範囲では北東－南西方向へ緩傾斜を呈し、北東－南西の比高差は約0.7ｍある。南北方向で約25ｍ、東西方向で約10ｍの範囲を調査対象とした。基本層序は現代盛土および堆積土層が厚さ0.2～2.0ｍ、近世の耕作土層が南端で厚さ約0.4ｍ、谷の北肩口で厚さ約1.7ｍ、中世の遺物包含層や耕作土層が厚さ約1.1ｍ堆積し、中世の遺物包含層下に古代の遺物包含層が堆積する。

近世の耕作土層は７谷北肩口付近から堆積する。肩口付近は南へ傾斜する土層堆積を示すが、肩口から約６ｍ地点からはほぼ水平堆積を示す。にぶい黄褐色から褐灰色を呈し、シルトを含む細粒砂か粗粒砂が主体である。

中世の遺物包含層や耕作土層は、下層は色調が褐灰色ないし黒灰色を呈し径0.2～3.0㎝の砂礫・粗粒砂を包含するシルト層が主体で、腐植土が含まれる。遺物は７世紀から８世紀後半に属する土師器・須恵器(図22－24・25)、13世紀に属する土師器・瓦器(図22－28～31)が出土した。上層は0.2～2.0㎝の砂礫や粗粒砂を包含する色調が灰オリーブから黄褐色のシルト層が概して水平堆積を示しており、耕作土層と考えている。

古代の遺物包含層は調査範囲内では谷底面のほぼ全体に堆積し、東端で厚さ約0.1ｍ、西端で厚さ約0.35ｍ堆積する。色調は褐灰色や黒色を呈し、粗粒砂を含む腐植土・径0.2～5.0㎝の砂礫・シルト層などが堆積する。北東部底面付近から７世紀から８世紀前半に属する土師器・須恵器(図22－13～22)が出土した。なお、弥生時代に属する遺物は出土せず、古墳時代に属する遺物は極めて少ない。

４　中世の遺構

中世の遺構には、丘陵部南東端に沿って南東－北西方向に延長する５溝、５溝に接して堆積する遺物包含層、７谷堆積土層などがある。このうち、７谷堆積土層は７谷の項で示した。

５溝(図７)　１区の丘陵南西端に沿って検出した溝である。Ｙ=－32,718を境に、以東は東南東－西北西方向に、以西は南東－北西方向にやや角度を変える。この５溝の延長形状は、現況の丘陵端の形状に近似することから、この変化点を含む平面形状は、当該期の丘陵端の地形を示す可能性が考えられ、古代・中世を通じてほぼ現況に近い地形を保っていたことが窺われる。東方は現代の攪乱により削平を受け、西方は直線的に延長したのち南折して７谷北肩口へ連続する。底面は南東側から北西方向に向かって下がり、７谷北肩口部から下部に向かって急激に落ち込む。検出面での規模は、現存長約24ｍ、幅1.0～2.5ｍ、深さ0.1～0.8ｍある。遺物は鎌倉時代の土師器・瓦器のほか古代の土器類および格子タタキ平瓦(図23－44)が出土した。

遺物包含層(図19－２)　７谷東肩口部で検出した中世に属すると考えられる遺物を包含する土層である。古代の整地土層の南西端上面に幅約3.0ｍの範囲に堆積する。厚さは厚い箇所で約0.3ｍある。鎌倉時代の土師器・瓦器(図23－42)のほか古代の土器類が出土した。５溝に接して堆積していることから、中世の耕作土層の可能性もある。

５　近世の遺構

近世の遺構には、丘陵部南東端に沿って平成13年度調査から連続すると考えられる北西－南東方向に延長する17溝(平成13年度調査の溝17)、７谷上層に堆積する耕作土層など、および１区から２区にかけての丘陵部に断続的に広がる耕作土層などがあり、耕作に関連する遺構が主体である。

第４節　遺物

調査では、竪穴住居、土坑、掘立柱建物、柵、柱列などの各柱穴、７谷、溝、整地土層、遺物包含層、耕作土層などから遺物が出土している。遺物内容は弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器・須恵器・瓦、中世から近世の土師器・瓦器・陶器・陶磁器・瓦が出土した。遺物出土総量は調査面積に対して僅少であり、遺物整理箱で４箱出土したに過ぎない。これらの多くは細片であり、図示できた遺物は44点にとどまる。以下、遺構ごとに説明を加える。

１　竪穴住居出土遺物

竪穴住居２・３(図21－１　図版９－１)　竪穴住居２の覆土から広口壺が、竪穴住居３に伴う柱穴からも土器が出土したが、図示できないほどの細片である。竪穴住居２・３のいずれかに伴う338土坑から弥生土器の甕(１)が出土した。いずれも弥生時代中期に属すると考えている。１は底部が完存する。底部は平底を呈し、体部はやや直線的に立ち上がる。体部内外面は磨滅が著しく調整不明である。底面全体に１枚分の葉脈痕が遺存する。色調は浅黄橙色である。底径10.0cm、残存高10.0cm。

竪穴住居１(図21－４～６・11・12　図版９－４～６・10－12)　壁溝から土師器甕(４・５)、小型土器(６)が出土した。このほか覆土から土師器小型壺が出土したが細片で図示できない。４は体部が球形を呈する。体部外面は縦および斜め方向のハケメ、体部内面は不定方向の板ナデののちナデ、底面はオサエやナデを行う。体部に粘土紐の接合痕がみられる。体部下半に焼成後の穿孔が１箇所ある。底部外面には部分的に媒が付着する。色調は暗橙色である。体部径15.3cm、残存高9.4cm。５は体部がやや

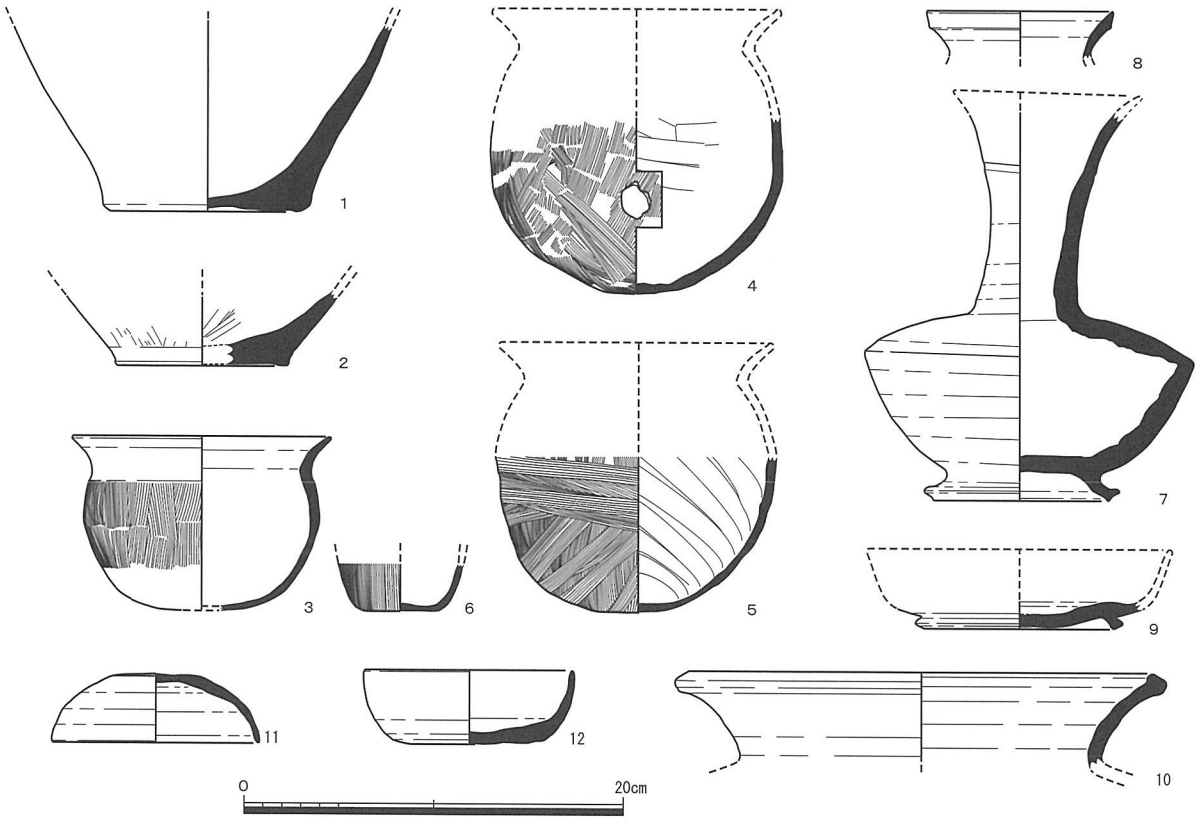


図21　遺物実測図１(１：４)

１：338土坑　４～６：竪穴住居１　３：213土坑　２・７・８：19土坑　９・10：133柱穴　11・12：竪穴住居１上面

歪な球形を呈する。外面は体部下半に縦および斜め方向のハケメ、体部中位に横方向のハケメを行う。体部内面は斜め方向および横方向の板ナデ、底部はオサエののちナデを行う。体部には部分的に媒が付着する。色調は浅黄橙色である。体部径14.8cm、残存高8.2cm。６は小型土器である。底部は平底を呈し、体部は内湾気味に立ち上がる。体部外面は直線方向のハケメ、底面は磨滅しているが直線方向のハケメが残る。体部内面はオサエおよびナデを行う。色調は浅黄橙色である。底径3.8cm、残存高2.6cm。４～６はいずれも口縁部を欠損しており、詳細な時期は決定しがたい。

一方、竪穴住居１上面に堆積する土層中から土師器、須恵器(11・12)、陶磁器が出土した。竪穴住居１の参考資料になると考え掲載した。11は坏蓋である。天井部はやや丸みを帯びる。口縁端部は丸くおさめる。内外面は回転ナデ、軟質焼成で、器面は磨滅が著しいが、天井部はヘラ切り未調整である。色調は灰白色である。口径10.9cm、器高3.6cm。12は坏である。底部は平底を呈し、内湾する体部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。器面は磨滅著しいが、口縁部内外面は回転ナデ。軟質焼成で、色調は浅黄橙色である。口径10.9cm、底径6.2cm、器高3.9cm。

２　土坑出土遺物

213土坑(図21－３、図版９－３)　土師器甕(３)が出土した。小型の甕で、底部はやや扁平な丸底を呈する。体部は扁球形を呈し、体部最大径は中位にある。口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内外面はナデ、外面は体部上半に縦方向のハケメ、体部下半にオサエののち横方向のナデ、体部内面はナデ、体部下半はオサエののちナデを行う。色調は暗橙色である。口径13.6cm、体部径12.5cm、残存高9.2cm。

19土坑(図21－２・７・８、図版９－２・７・８)　土師器高坏、須恵器壺(７・８)のほか弥生土器甕(２)が出土した。２は弥生土器甕の底部で、平底を呈する。体部外面はヘラによる左上方向のナデ、底部端面はナデ、底部外面はオサエのちヘラによるナデを行う。体部付近には媒が付着する。底部内面はオサエののちヘラによるナデを行う。色調は明黄褐色である。復元底径9.3cm、残存高4.1cm。弥生時代中期に属する。７は長頸壺である。口縁部を欠損するが、口頸部から底部は完存する。底部は平底を呈し、下方に開く高台がつく。高台端部はやや突出する。体部最大径は肩部にある。口頸部は外反する。やや不鮮明であるが口頸部に沈線が１条巡る。外面は口頸部から体部上半にかけて回転ナデ、体部下半は回転ヘラケズリ、部分的に左下がりのヘラケズリののち回転ナデ、底面はナデ、高台は回転ナデを行う。体部内面は回転ナデ、頸部接合部には縦方向のナデが明瞭に残る。器面に剥落がみられる。色調は灰色である。高台径9.2cm、体部径17.5cm、頸部径6.0cm、残存高20.5cm。７世紀後半から８世紀初頭。８は広口の短頸壺である。口縁部は外反し、端部は面をもつ。内外面ともに回転ナデを行う。色調は青灰色である。口径9.8cm、残存高2.5cm。

３　掘立柱建物、柵、柱穴出土遺物

建物３(図23－43、図版12－43)　建物３を構成する170・171・173・174・175・177・178柱穴からはそれぞれ土師器が出土したが、図示できないほどの細片である。179柱穴の掘形から平瓦(43)が出土した。凸面には格子目タタキ、凹面には布目痕がある。残存幅10.6cm、残存長11.9cm、厚さ2.3cm。当該地周辺で瓦を葺く構造を有する施設には白鳳期創建とされる高宮廃寺跡があり、高宮廃寺跡に関連する遺物と考えられる。

133柱穴(図21－９・10、図版９－９・10)　須恵器(９・10)が出土した。９は坏である。口縁部は欠損し、底部は完存する。底部は平底を呈するが、やや湾曲する。底部外面はヘラ切りののち高台を貼り

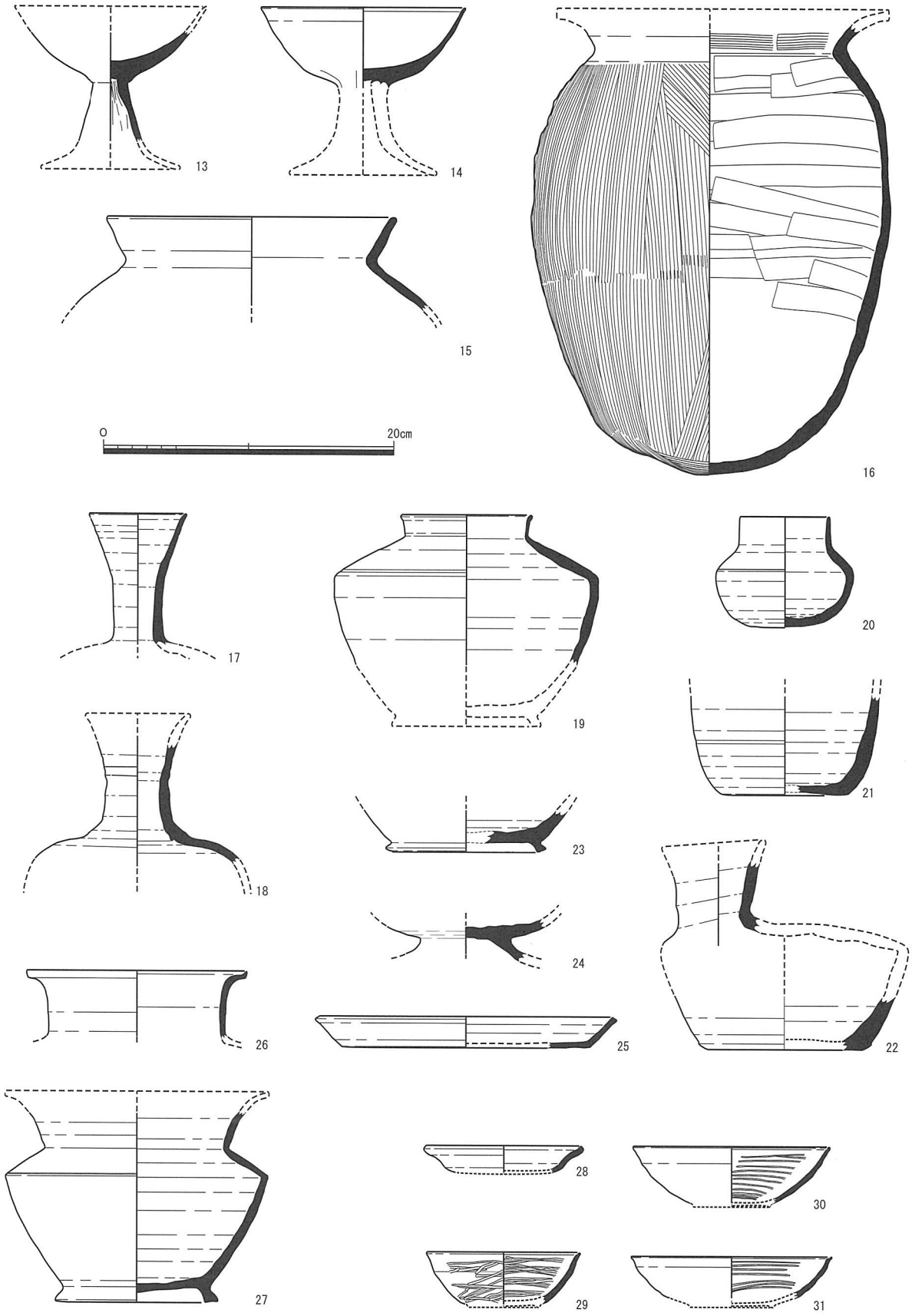


図22　遺物実測図２（１：４）

13～22：７谷古代遺物包含層　24・25・28～31：７谷中世遺物包含層　23：７谷南東肩口遺物包含層　26・27：７谷北肩口遺物包含層

付ける。外面は直線方向のナデ、高台接合部および底部内面は回転ナデを行う。色調は灰色である。底径10.4cm、残存高1.5cm。10は甕の口縁部である。口頸部は外反し、端部は内側に肥厚し丸みをもつ。内外面はともに回転ナデを行う。器面にはわずかに自然釉がかかる。色調は灰色である。復元口径24.6cm、残存高5.0cm。８世紀前半と考えられる。

このほか、建物では建物１(25柱穴)、建物２(42柱穴)、建物４(188・195柱穴)、建物６(224柱穴)、建物７(167・168柱穴)、建物９(71・73柱穴)、建物10(86柱穴)、建物11(51柱穴)、建物12(61・68柱穴)、建物13(55・112柱穴)、建物14(105・113柱穴)、建物17(132・137柱穴)から、柵では柵１(14・16・217柱穴)、柵２(265柱穴)、柱列２(237・239柱穴)などから土師器、須恵器が出土した。いずれも細片で、図示できるものはない。

４　溝出土遺物

５溝(図23－44、図版12－44)　土師器、須恵器、瓦器、瓦(44)が出土した。44以外は図示できないほどの細片である。44は平瓦で、凸面に格子目タタキ、凹面には布目痕がある。側縁はヘラケズリを行う。色調は灰色である。残存幅17.4cm、残存長30.1cm、厚さ2.1cm。

このほか、４溝・181溝からは古代の土師器、須恵器が、12溝・20溝からは古代の土師器が、17溝および丘陵南端で検出した近世の耕作鋤溝からは土師器、須恵器、陶磁器が出土したが、いずれも図示できないほどの細片である。

５　７谷出土遺物

７谷堆積土層は堆積状況によって近世、中世、古代に大きく分かれ、近世の土層からは古代から近世の土師器、須恵器、瓦器、陶磁器が、中世の遺物包含層などからは古代から中世の土師器須恵器、瓦器が出土した。古代の遺物包含層からは土師器、須恵器が出土している。

７谷古代遺物包含層(図22－13～22、図版10－13～16・19・20、図版11－17・18・21・22)　土師器には高坏(13・14)、甕(15・16)が、須恵器には長頸壺(17・18)、広口壺(19)、短頸壺(20)、壺(21)、平瓶(22)、甕がある。13・14は高坏である。13は口縁部と脚底部を欠く。坏部は椀形を呈する。内外面ともに器面の剥落が激しく調整不明である。脚部内面にはシボリ痕が残る。色調は橙色である。残存高7.6cm。14は口縁端部をわずかに欠き、坏部は脚部との接合箇所で剥離し、脚部を欠損する。坏部は椀形を呈する。坏部内面は器面の剥落が著しく調整不明であるが、わずかにナデが残る。口縁部内外面はナデ、坏部外面下半には脚部接合に伴うナデを行う。口縁部には焼成時の黒斑がある。色調は浅黄橙色である。口径14.2cm、残存高5.6cm。15・16は甕である。15は口縁部から体部上半にかけて遺存する。口縁は外傾し、口縁端部は丸くおさめる。内外面は器面の剥落が著しく調整不明であるが、わずかにナデが残る。色調は橙色である。復元口径19.8cm、残存高6.4cm。16は口縁端部を欠くが、ほぼ完形である。底部は丸底で、体部は長胴を呈する。口縁部は外反する。口縁部内外面はナデ、体部外面は縦方向のハケメ、口縁部内面は横方向の粗いハケメ、体部内面は体部上半に横および斜め方向の板ナデ、下半はオサエおよびナデを行う。色調は黄褐色である。頸部径17.4cm、体部径24.8cm、残存高30.9cm。17は長頸壺の口頸部で、口頸部との接合部分で体部と剥離する。口頸部は外傾し、上半はやや開く。口縁端部は丸くおさめる。内外面はともに回転ナデを行う。色調は灰色である。復元口径6.7cm、頸部径3.8cm、残存高9.0cm。18は口縁端部と体部下半を欠く。口頸部は外傾する。肩部はなで肩を呈する。頸部にやや突出した段状の稜があり、体部は砲弾形を呈するものと思われる。口頸部に沈線が１条巡る。内外面は回転ナデ、頸部に右斜め方向の巻き上げ痕が明瞭に残る。頸部接合部には縦方向のナデが明瞭に残る。

色調は灰色である。頸部径4.6cm、残存高8.5cm。19は短頸の広口壺で、体部下半を欠損する。体部は内湾気味に立ち上がり、肩部は強く張る。体部最大径は肩部にある。口縁部はやや外傾し、端部はわずかに肥厚し丸くおさめる。肩部に沈線が１条巡る。内外面は回転ナデを行う。体部に粘土紐接合痕が残る。色調は灰白色である。口径9.0cm、体部径18.2cm、残存高10.4cm。20は短頸壺で、本調査出土遺物中で唯一の完形品である。底部はやや扁平な丸底を呈する。肩部はやや張り、沈線が１条巡る。口縁部は直立し、端部は丸くおさめる。外面は口縁部から体部上半にかけて回転ナデ、体部下半は回転ヘラケズリ、底部はヘラ切り未調整。内面は回転ナデを行う。色調は灰色である。口径6.2cm、底径4.4cm、頸部径6.5cm、体部径9.6cm、器高7.6cm。21は壺で、体部上半以上を欠く。底部は平底で、体部は底部から内湾気味に立ち上がり、長胴を呈すると考えられる。体部外面は中位に回転ナデ、下半に回転ヘラケズリ、底面はヘラによるナデを行う。体部下半に沈線が１条巡る。体部内面は回転ナデ、底面はヘラによる掻き取り状のナデを行う。色調は灰色である。底径8.8cm、残存高7.0cm。砲弾形を呈する壺の可能性がある。22は平瓶である。口縁端部および体部上半を欠く。口頸部は完存する。底部は平底を呈する。体部は底部から内湾気味に立ち上がる。体部上半には円盤閉塞痕跡が遺存する。口頸部は外傾する。口頸部は内外面ともに回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ、底部内面は回転ナデを行う。口頸部内外面、肩部外面、底部外面に自然釉がかかる。色調は灰色である。底径10.6cm、頸部径5.1cm、口縁部残存高4.9cm、体部残存高3.8cm。

７谷中世遺物包含層(図21－24・25・28～31、図版11－24・25・28～31)　須恵器高坏(24)、皿(25)、土師器皿(28)、瓦器椀(29～31)がある。24は高坏の底部から脚部の破片である。坏底部は平底状を呈する。脚部は下外方に強く張り出し、端部は欠損する。内外面はともに回転ナデを行う。色調は灰色である。残存高3.0cm。25は皿である。底部は平底で、口縁部は短く底部から直線的に外に開く。口縁端部は面を有する。口縁部は内外面とも回転ナデを行う。底部外面はヘラ切り未調整。色調は灰白色である。復元口径20.0cm、復元底径17.2cm、器高2.1cm。８世紀後半。28は土師器皿である。底部を欠損する。体部は屈曲して立ち上がる。口縁端部は上につまみ上げ、丸くおさめる。口縁部内外面はナデ、体部下半外面はオサエ。体部内面はナデを行う。色調は灰白色である。11世紀末。口径10.6cm、残存高1.9cm。29～31は瓦器椀で、いずれも底部を欠損する。29は体部が緩やかに内湾し、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸くおさめ、端部内面に沈線が巡る。口縁部は内外面ともにナデ、体部外面はオサエののち横および斜め方向に粗いヘラミガキを施す。体部内面はナデののち、圏線状のヘラミガキを施す。色調は灰白色である。口径10.5cm、残存高3.6cm。30は体部が内湾気味に立ち上り、口縁部は外傾し、口縁端部は丸くおさめる。口縁端部内面に沈線が巡る。口縁部内外面はナデ、体部外面はオサエののちナデ、体部内面は縦および斜め方向のナデののち、圏線状のヘラミガキを施す。色調は暗灰色である。口径13.6cm、残存高3.9cm。楠葉型、13世紀前葉。31は体部が内湾気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、端部内面に段を有する。口縁部は内外面ともにナデ、体部外面はオサエののちナデ、体部内面はナデののち、圏線状のヘラミガキを施す。色調は灰黄色である。口径13.8cm、残存高2.9cm。大和型、12世紀後葉。

７谷北肩口遺物包含層(図22－26・27、図版10－27、図版11－26)　７谷北肩口に堆積した土層から出土した遺物である。須恵器壺(26・27)、甕がある。26・27はともに広口壺である。26は口頸部が遺存する。口頸部は直立し、口縁部に向かって外反する。口縁部は受口状を呈し、端部は上方につまみあげ、丸くおさめる。内外面は回転ナデを行う。器面に自然釉がかかる。色調は灰色である。口径15.2cm、残

存高4.7cm。27は口縁端部を欠く。底部は平底を呈する。体部は外傾し、肩部に稜を有する。口頸部は外傾する。高台は貼付高台で、下外方へ強く張り出す。外面は回転ナデ、底面はナデ、内面は回転ナデを行う。色調は暗青灰色である。底径11.2cm、体部径18.0cm、残存高13.1cm。

７谷南東肩口遺物包含層(図22－23　図版11－23)　須恵器壺(23)が出土した。23は底部と体部下半が遺存する。底部は平底を呈し、断面形が台形を呈する貼付高台がつく。高台端部はやや外方に肥厚する。体部内外面は回転ナデ、底部内面は直線方向のナデを行う。底径10.2cm、残存高2.9cm。

古代整地土層(図23－32～41、図版12－33～35・37～40)　土師器、須恵器が出土した。土師器には坏、高坏(32)、甕(33～35)が、須恵器には坏蓋(36・37)、坏(38)、壺(40・41)、甕がある。32は高坏で、口縁部と脚部を欠損する。坏部と脚部との接合部分で剥離する。坏部は平坦で、口縁部に向かってやや上方に開く。内外面はわずかにナデが残るほかは器面の磨滅が著しく調整不明である。坏部下半外面には脚部接合時のヘラケズリによる面取り痕が遺存する。色調は橙色である。残存高2.8cm。33～35は土

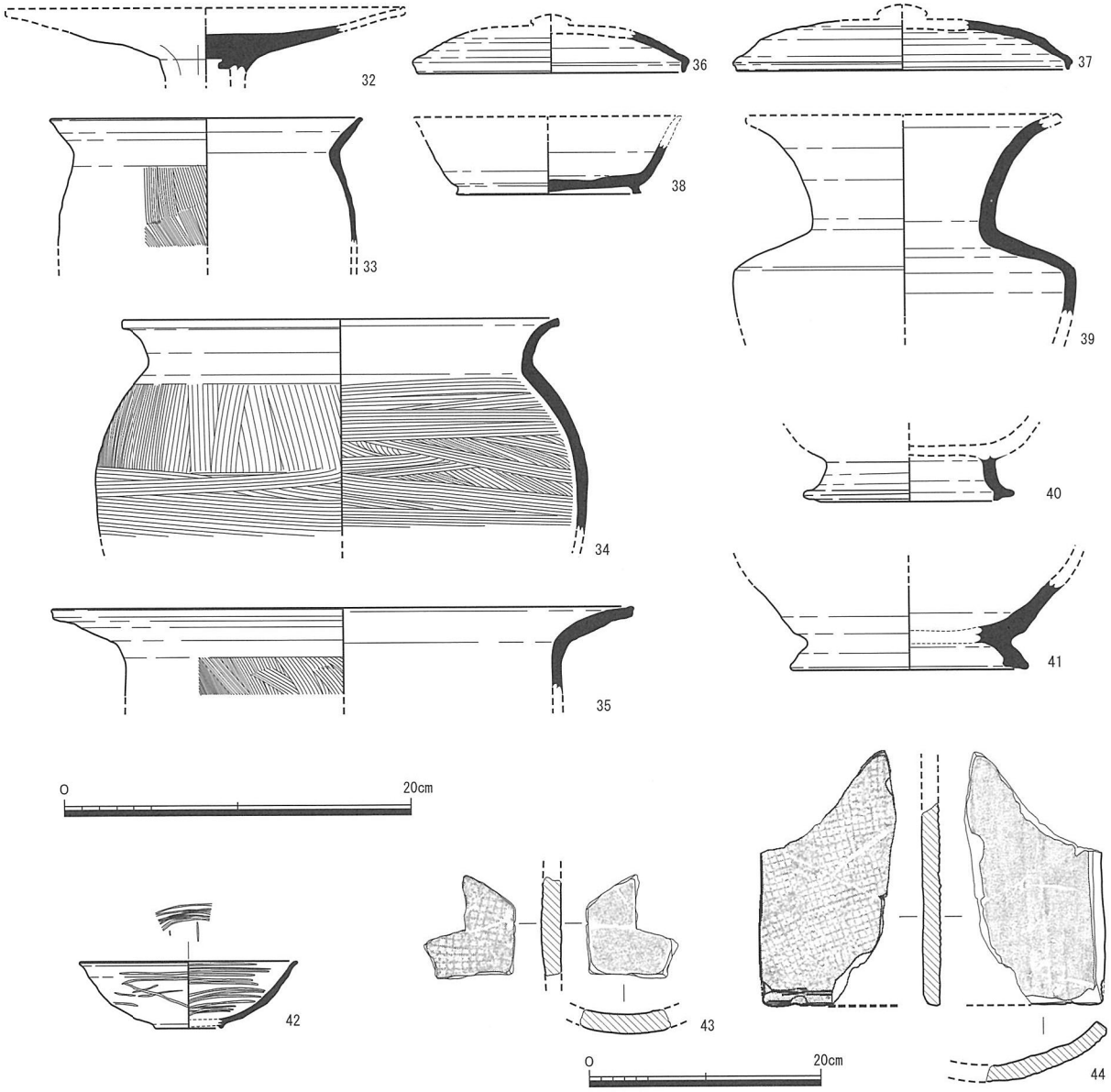


図23　遺物実測図３（１：４・１：６）

32～41：古代整地土層　42：中世遺物包含層　43：建物３　44：５溝

師器甕である。33は体部下半を欠損する。口径と体部径はほぼ等しく、体部はあまり張らない。口縁部は外傾し、端部は丸くおさめる。口縁部内外面はナデ、体部外面は縦および斜め方向のハケメ、体部内面は器面の磨滅が著しく調整はわずかにナデが観察できる程度である。色調は暗黄橙色である。口径18.0cm、体部径17.2cm、残存高7.4cm。34は体部下半を欠損する。体部は球形を呈する。体部最大径は中位にあり、口縁部径より体部径が大きい。口縁部は外反し、口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部は内外面ともにナデ、体部外面は上半に縦方向のハケメ、中位に横方向のハケメを行う。体部内面は横および斜め方向のハケメを行う。色調は暗橙色である。口径25.0cm、体部径28.3cm、残存高12.5cm。35は体部の一部と口縁部が遺存する。長胴状の体部に大きく外側に開く口縁部がつく。口縁端部は上方にやや肥厚する。口縁部は内外面ともにナデ、体部外面は縦方向のハケメ、体部内面は器面の磨滅が著しく調整はわずかにナデが観察できる程度である。口縁部外面に媒が付着する。色調は暗黄橙色である。口径33.4cm、残存高5.0cm。36・37は坏Ｂの蓋である。36は天井部を欠損する。やや丸みを帯びた天井部から直線的に口縁部に至る。口縁端部は下方に向かってやや尖り気味に丸くおさめる。口縁部は内外面ともに回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリを行う。色調は灰色である。口径15.4cm、残存高2.4cm。37はやや丸みを帯びた天井部から緩やかに口縁部に至る。口縁端部にかけてやや屈曲し、端部は下方に向かってやや尖り気味に丸くおさめる。内外面はともに回転ナデを行う。色調は灰色である。口径19.0cm、残存高2.9cm。36・37とも７世紀後半から８世紀前半。38は坏である。口縁部を欠損する。底部は平底を呈し、外側に短く開く貼付高台が付く。体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部外面下半は回転ヘラケズリ、高台部は回転ナデ、底部はナデを行う。体部内面は回転ナデを行う。色調は灰色である。底径10.4cm、残存高2.9cm。39は広口壺である。口縁端部および体部下半を欠く。口頸部は外上方に大きく開き、肩部はややなで肩気味で、沈線が１条巡る。肩部外面と口頸部内面には自然釉がかかる。内外面は回転ナデを行う。色調は灰色である。頸部径10.4cm、体部径19.7cm、残存高11.4cm。40は壺の高台である。高台は貼付高台で、下方に強く張り出し、端部は下方および外方につまみ丸くおさめる。内外面は回転ナデを行う。色調は灰色である。底径12.2cm、残存高2.7cm。41は壺の底部で、体部以上を欠損する。高台はやや下外方に開く貼付高台で、端部は内側につまみ丸くおさめる。内外面は回転ナデを行う。色調は灰色である。底部径13.4cm、残存高5.1cm。

中世遺物包含層　(図23－42、図版12－42)　古代の整地土層の上に堆積する中世の遺物包含層から瓦器椀(42)が出土した。体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、やや尖り気味に丸くおさめ、口縁端部内面に段を有する。高台は断面三角形を呈する。口縁部は内外面ともに回転ナデ、体部外面はオサエ、ナデののち、横および斜め方向のヘラミガキを施す。底部外面は回転ナデを行う。体部内面は回転ナデののち、縦および斜め方向のハケメ、平行に近い横方向のヘラミガキを施す。見込みには直線方向の暗文が認められる。色調は灰色である。口径12.6cm、底径3.8cm、器高3.9cm。大和型、12世紀後葉。

第４章　ま　と　め

第１節　遺跡の立地と遺構分布

今回の大尾遺跡発掘調査では、弥生時代から鎌倉時代に至る遺構を検出し、多くの成果を挙げることができた。平成13年度調査を含め大尾遺跡でこれまで判明した成果についての検討を行う。

１　遺跡の立地　まず、地形図[1)]から起こした現況等高線(図24)を概観すると、大尾遺跡の立地する丘陵は、同遺跡の北東側に位置する太秦遺跡の南部(平成15年度調査地点[2)])から南西方向に連続して延長すると想定できる。当該丘陵は北東側を除く３方は段丘状に下がり、標高45～47m地点から南方向および南東方向へ延長し、さらに大小複数の開析谷が形成される。平成15年度調査の太秦遺跡と今回調査地点の間には北西―南東方向の大規模な開析谷があり、両遺跡を画する。また、平成13年度調査地点と今回の調査地点間にも開析谷があり、両地点は、それぞれ見掛け上の独立した丘陵部を呈する。今回調査で検出した開析谷(７谷)は、大尾遺跡における両調査地点を画する地理的景観を形成しており、各時代にわたる特徴的な遺構分布が窺われる。

今回の調査地点の丘陵部では地山標高43～45m地点のほぼ全域で遺構を検出しており、調査区南東部の調査区外は等高線の張り出し状況や遺構の分布状況から、さらに遺構が広がることが想定できる。調

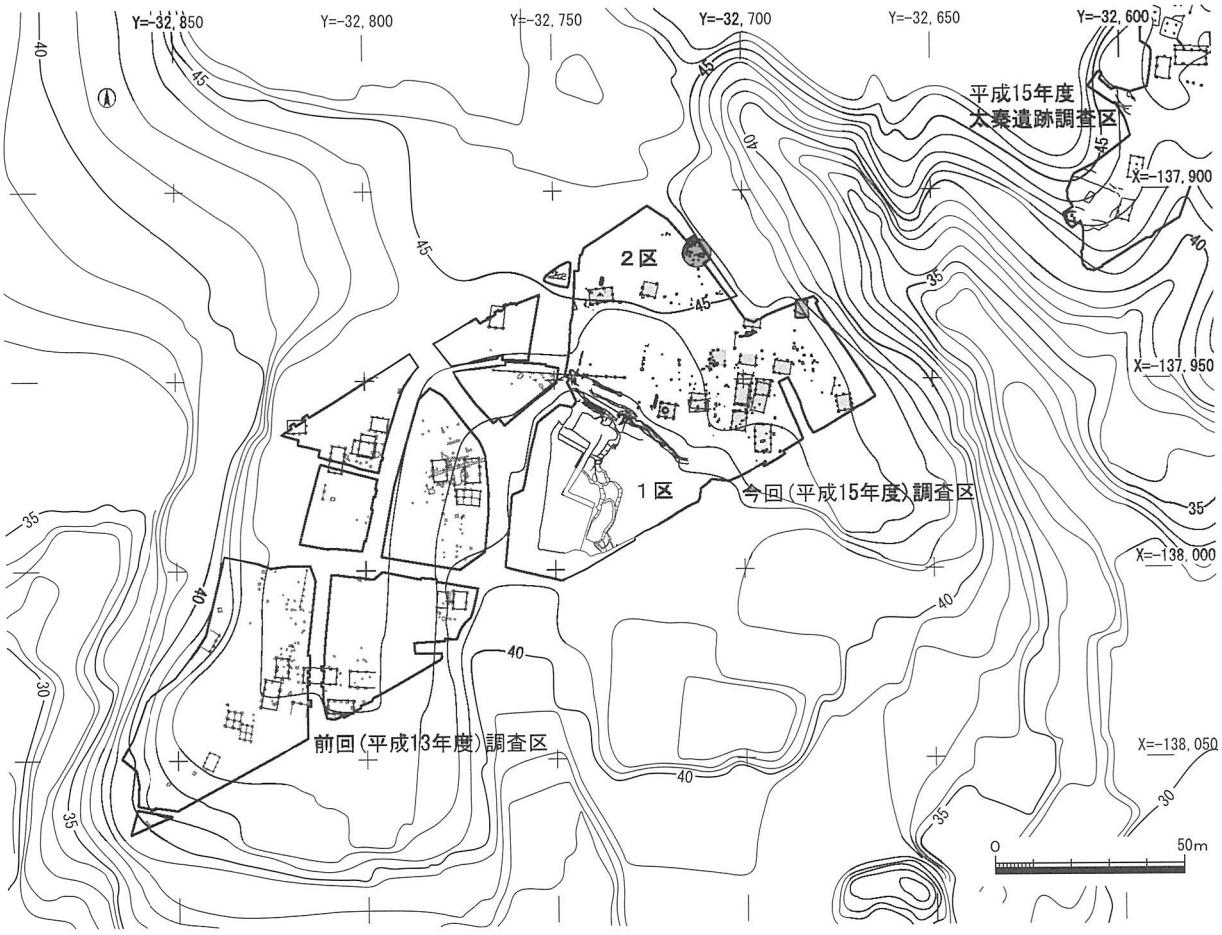


図24　大尾遺跡現況等高線図(１：2,000)

査区北部は調査区内で最も標高の高い地点であり、北西隅部では柱穴状の遺構数基や遺物包含層などを検出したが、同じ標高にある北東部では竪穴住居２・３や数基の柱穴状遺構を除けば、遺構は検出していない。従って、調査区北部一帯は近代以降の宅地化により地山上面が削平を受けた可能性が高いと考えられ、当調査地点と前回調査地点ならびに太秦遺跡との遺跡分布を考える上で惜しまれる。

第２節　調査成果の検討

１　弥生時代の遺構

丘陵部では、弥生時代中期の遺構を検出することができた。

大尾遺跡の平成13年度調査では、30基ないし復元では35基にのぼる弥生時代中期後半の方形周溝墓が検出された。方形周溝墓は各々周溝を共有するものもあり、主軸方向を丘陵の尾根方向に合わせて造作されており、さらに方形周溝墓群の東端では墓域を区画すると想定される北西－南東方向に延長する溝(溝20)も検出されていることから、大尾遺跡丘陵部の西部については墓域設定が計画的になされたことが窺われる。

今回の調査では竪穴住居を検出し、大尾遺跡における初例となった。前述したような埋葬に関連する遺構は検出しておらず、開析谷を挟んで東側丘陵が住居空間域、西側丘陵は墓域と、近接した両調査地点における区分された土地利用状況を想定できたたことは、今回の調査成果の一つと考えている。平成13年度調査区では方形周溝墓群の主体部や周溝から多数の土器、石器が出土したが、今回の調査区では丘陵部では竪穴住居２・３覆土および338土坑から出土した甕のほかには19土坑に混入していた甕がある程度で量的な差異は大きい。墓域と居住域による差異とは想定できず、今回の調査区では居住域としての利用は少なかった可能性もあろう。

一方、今回の調査地点と開析谷を挟んで東側に位置する太秦遺跡では、弥生時代中期の竪穴住居が多数検出されており、未調査箇所である開析谷の北側一帯を含めて住居空間が連続的に広がっていた可能性は高いと想定できよう。ただし、太秦遺跡では方形周溝墓も検出されており、当該地域における遺構の変遷・分布については、さらに周辺の調査報告をまち検討を加えたいと考えている。

竪穴住居　竪穴住居２・３は重複した状態で検出した。外側の竪穴住居３が内側の竪穴住居２の規模を拡大した建て替えと考えている。竪穴住居を検出した地点から西・北側の遺構分布は、前述したような削平を受けた結果により竪穴住居が竪穴住居２・３以外未検出であるが、今回の調査区内の１箇所周辺に複数の当該期の竪穴住居が存在した可能性は高いと考えられる。竪穴住居２・３は標高45m前後の丘陵東傾斜際の変化点付近に位置する。ところで、平成13年度調査の方形周溝墓群は、概して標高40～44mの丘陵部から西側斜面に分布している。上記傾向は、竪穴住居・方形周溝墓などの遺構の分布が平面的な区分に加え高低差による相対的な区分も指向している可能性があるかもしれない。

なお、平成13年度調査区では古墳時代の遺構として、古墳時代後期の土壙墓や木棺墓が検出されており、断続的ながら墓域として利用されたことが明らかにされている。

２　古代の遺構

丘陵部では竪穴住居、掘立柱建物、柵、柱列、土坑、溝などを検出した。

竪穴住居　竪穴住居１は標高約44mの丘陵東斜面際の変化点付近に位置しており、弥生時代の竪穴住居とともに丘陵頂部から東側に立地する傾向が窺われる。従って、太秦遺跡の平成15年度調査区の南西端から大尾遺跡へと開析谷を迂回して連続する当該丘陵は、丘陵頂部から東半ならびに南半部に居住

域が形成されたと想定できる。竪穴住居１出土遺物はいずれも甕の体部で、７世紀に降る可能性がある。平成13年度調査区では６世紀から７世紀前半の遺物が多く出土した。７谷古代遺物包含層には一部６世紀から７世紀前半の遺物が含まれる。大尾遺跡の土地利用は遺物からみると弥生時代中期から間をおき、古墳時代後期から飛鳥時代になり再び開発の手が及んだものと想定できる。

なお、大尾遺跡に近接する遺跡では今回の遺構分布と近似する竪穴住居と掘立柱建物が共存する事例があり、太秦遺跡、高宮遺跡、寝屋東遺跡、寝屋南遺跡などで検出されている。

掘立柱建物　今回の調査で検出した掘立柱建物は、柱穴から遺物は出土するものの大半の遺物は細片で、時期を決定するには至らない。しかし、細片を含め遺物を概観すると、奈良時代（８世紀後半）までの建物群と捉えることができ、大尾遺跡の南西方向に位置する高宮廃寺跡の造営時期（７世紀後半）とほぼ同時期にこの丘陵にも開発が及び、奈良時代（８世紀後半）までは連続することが窺われる。

一方、建物（柱穴）の重複状態、ならびに建物配置および建物の主軸方向などを考慮すると、建物群に

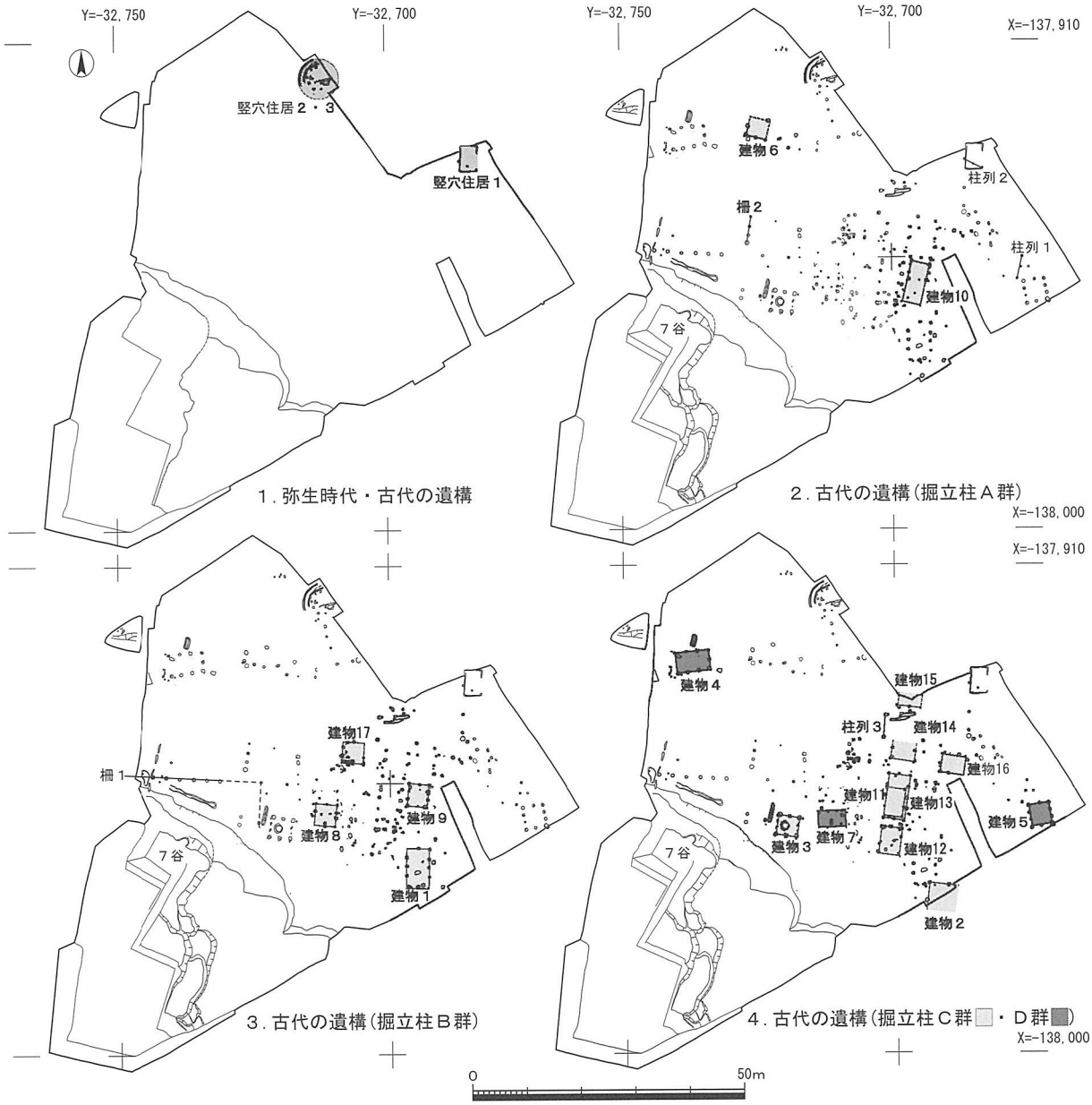


図25　遺構変遷図（１：1,250）

は少なくとも３時期程度の時期差があると考えられる。また、柱穴相互の直接の重複状態により新旧関係にある建物があることが判明しており、建物９と建物10では建物10が古く、建物11と建物13では建物13が古い。

建物群のうち、建物10は建物９より古く、周辺の建物11～13とは直接的な重複状態にはないが、近接していることから同時併存は想定できず、建物群の中では最も古い建物に位置付けることができる。建物６は建物10と直線距離で約35m離れ、比高差は約0.6mあるが、主軸方向の振れが座標北に対し東へ13度と同一であり、併存する可能性はある。この建物群をＡ群と捉える。柱列２は遺物が出土せず時期は明確ではないが、主軸方向の振れが下記に記す掘立柱建物とは振れが大きく異なるため、この群に含めておく。

次に、建物１と建物９は梁行の幅は4.2m・3.6m、主軸方向の振れは３度・６度とやや規模や振れが異なるものの桁行西柱筋はほぼ揃う。建物８・17は主軸方向が揃うこと、建物８桁行東柱筋と建物17桁行西柱筋がほぼ直線方向に並ぶこと、建物８北妻側柱筋と建物９南妻側柱筋がほぼ直線方向に並ぶこと、建物８南妻側柱筋－建物１北妻側柱筋間と建物17南妻側柱筋－建物９北妻側柱筋間は各々約５mの間隔にあることなどから、建物１・８・９・17は計画的な配置によって造作された可能性が考えられる。また、建物９は建物11・13と近接しており同時併存は想定できない。これら建物群をＢ群と捉える。

さらに、建物12～15は建物の主軸方向が座標北に対し約７度東へ振れること、梁行の幅は3.8～4.4mとやや規模が異なるものの桁行西柱筋は一直線に揃うことから、計画的に造作された可能性があり、これら建物群をＣ群と捉える。また、建物３は主軸方向が座標北に対し約９度東へ振れ、建物12～15の振れとは異なるが、建物３の南妻側柱筋は建物12の南妻側柱筋と揃うことから同時期の可能性も指摘できる。また、建物２・16は建物12～15の振れに近似することからこの建物群に含めておく。建物11は建物12～15と桁行西柱筋を揃えており、Ｃ群の建物と捉えることができ、検出位置から建物13の建て替えと考えることができる。

Ｂ群(建物１・８・９・17)とＣ群(建物２・３・11～16)は、建物９と建物13が近接すぎることから併存したとは想定できないが、主軸方向の振れは近似しており、一方の建物群に一方の建物群の建て替えが含まれると想定することは可能であろう。

残る建物４・５・７はいずれも主軸方向が座標北に対し西へ振れる建物であり、上記建物群とは主軸方向が異なり、Ｄ群としておく。

以上のことをまとめると、Ａ群はＢ・Ｃ群と近接しており併存は想定できない、また、Ａ群の建物(建物10)とＢ群の建物(建物９)は直接重複状態にあり、Ａ群が先行する建物群と捉えることができる。Ｄ群の建物７はＢ群の建物８と建物範囲で重複状態にあるが、前後関係は不明である。建物群はＡ群→Ｂ・Ｃ群へと変遷すると捉えることができる。

これら建物群のうち、建物３・８・17は平面規模が近似しており、時期差はあるものの全く断絶した状況で新たな建物が造作されたものではないことを示していると考えられる。この傾向は、Ｄ群の建物５にも言及でき、且つ建物５の振れはＣ群の建物３の振れと座標北の軸線で折り返して相似した位置にあることから、２棟の建物の配置には関連性のある可能性があろう。

建物はいずれも２間×２間・２間×３間・２間×４間程度の規模であり、大形建物は含まれない。この成果は平成13年度調査成果と同様である。また、複数棟、複数時期にわたり一定の配置性や主軸方向の規則性が見い出されることから、少なくともこの丘陵で機能が完結するような一集落的な建物群では

表２　掘立柱建物・柵・柱列計測値一覧表

遺構番号	規模(間数)	規模(m)	梁行(m)	桁行(m)	建物方向	振れ
建物１	２×４	4.2×7.2	2.15	1.8	南北棟	N-３°-E
建物２	?×?	3.5×3.2	－	－	－	N-６°-E
建物３	２×３	3.9×3.8	1.95	1.27	南北棟	N-９°-E
建物４	２×３	3.7×6.2	1.88	2.1	東西棟	E-６°-N
建物５	２×３	3.7×4.0	1.85	1.3	南北棟	N-10°-W
建物６	２×２	3.8×3.6	1.9	1.7	－	N-13°-E
建物７	２×３	3.0×5.0	－	1.65	東西棟	E-２°-N
建物８	２×３	3.9×3.9	1.9	1.3	南北棟	N-５°-E
建物９	２×３	3.6×4.1	1.9	1.37	南北棟	N-６°-E
建物10	２×４	3.4×7.6	1.75	1.9	南北棟	N-13°-E
建物11	２×３	3.4×5.1	1.7	1.7	南北棟	N-７°-E
建物12	２×３	3.8×4.8	1.9	1.65	南北棟	N-７°-E
建物13	２×４	4.0×8.4	2.0	2.1	南北棟	N-７°-E
建物14	１×１?	4.4×2.0	－	－	南北棟	N-７°-E
建物15	２×?	4.4×0.0	－	－	南北棟	E-７°-S
建物16	３×２	4.5×3.4	1.9	1.5	東西棟?	E-７°-S
建物17	２×３	3.9	1.95	1.3	南北棟	N-５°-E
柵１	５＋α	12.4	2.4～2.6	－	東西柵	E-４°-S
柵２	3	5.0	1.6・1.8	－	南北柵	N-８°-E
柱列１	2	4.2	2.1	－	南北柱列	N-７°-E
柱列２	2	3.7	1.35	－	東西柱列	N-33°-E
柱列３	1	4.1	1.35	－	南北柱列	N-４°-E

ない。前述したように高宮廃寺跡などの中核施設に付属する建物群と考えることができよう。なお、掘立柱建物群の柱穴からは各建物の年代を決める遺物は出土せず、掘立柱建物群の変遷を遺物から追求することはできなかった。しかし、整地土層および７谷遺物包含層などの出土遺物は、一部古墳時代(６世紀)のものも含まれるが、大半が７世紀後半から８世紀前半に属すると考えられ、これら遺物が掘立柱建物群の時期を示唆するものであろう。出土遺物の様相を概観すると、供膳具は極めて少なく、貯蔵具や煮炊具が多数を占める特徴的な状況が見られる。また、今回の調査地点を特徴付ける遺物として古代の格子目タタキの平瓦が挙げられる。建物３の179柱穴掘形から平瓦(図23－43)が出土している。近接する遺跡では、小路遺跡、太秦遺跡からも瓦が出土している。当該地周辺で瓦を葺く構造をもつ施設は白鳳期創建の高宮廃寺跡がある。当該地は地理的にも最も近接した丘陵上にあり、この建物群が高宮廃寺跡との関連を示す遺物として捉えることができる。

柵　柵１は平成13年度調査分をあわせて12間検出することができた。柵１東端柱穴から東は柱穴列が連続しないため除外したが、東延長上で柵１東端柱穴から約7.6mの地点で１基、その柱穴から南接して約7.4mの地点で１基柱穴を検出しており、柵１の柱間2.4～2.6mで割ると、それぞれ３間分に相当する。想像を逞しくすれば、柵は平成13年度調査区から東へ15間分延長し、直角に３間分南接することが想定できる。柵によって区画された地域は、古代の整地土の敷設範囲に相当する。さらに、15間分の柵に想定できるとすれば、柵１の西端柱穴は谷(７谷)の西端を画する位置に、東端柱穴は東端を画す

る位置に相当する。谷（７谷）を挟んだ両丘陵の空間配置に関わる遺構として、計画性を持った区画施設と捉えることができるのではないだろうか。柵１は主軸方向の振れからＢ群に伴うと考えられる。

大尾遺跡平成13年度調査では掘立柱建物が21棟、塀４条が検出されている。今回の調査ではほぼ同時期に併行したと考えられる17棟の掘立柱建物、２列の柵、３列の柱列を検出した。谷を挟んだ大尾遺跡の２箇所の地点は、古代に至って同一の目的による開発が及んだことが想定できる成果と言える。

平成13年度調査で検出された掘立柱建物、塀は、整地土層から出土した遺物などにより７世紀後葉から８世紀前葉（Ⅰ－１～３期、Ⅱ期）と捉えられている。検出された掘立柱建物と塀の64％がⅠ－１期に相当し、建て替えを含めれば実に88％がⅠ－１～３期に造作されたことを示している。

７谷　谷地形でも多くの知見を得ることができた。谷の肩口は直線ないし鉤形に曲折しており、人為的な形状を呈する。谷地形の利用が７世紀代に始まり、谷を含めた丘陵地全体にわたり大規模開発が行われた状況が窺われる。弥生時代から古墳時代の遺物がほとんど出土しないことは、当該期にこの谷が存在しなかったことを示すのではなく、７世紀以降に人為的な改変が加えられたことによって、前代の谷形状が堆積土層とともに削平されたことも想定できる。

７谷からは今回の調査で出土した遺物の半数が出土している。古代の遺物包含層には一部古墳時代（６世紀）のものも含まれるが、大半が７世紀後半から８世紀前半に属する。しかし、中世遺物包含層からは８世紀後半（ないし９世紀初頭）に属すると考えられる須恵器（図22－25）や、12世紀前後に属する土師器（図22－28）が出土している。極めて少量の土器ではあるが、これらの時期にも断続的に当該丘陵部に対して何らかの働きかけがあったことを傍証する遺物と捉えることができよう。

３　中世以降の遺構

丘陵南西縁には南東から北西方向に延長し谷へ連続する中世の溝（５溝）を検出した。５溝は中世の７谷へ連続しており、丘陵部の雨水を受けて直接谷へ排出した施設と考えられる。丘陵部は中世には耕作地として開発が行われたことを窺わせるが、丘陵部では耕作土層や耕作に関連する溝などは検出していない。中世の７谷では、中世の耕作土層と考えられる土層の堆積を検出しており、この時期には丘陵部上ではなく谷地形に対して耕作地を設定していた可能性がある。

近世に属する耕作に関連する溝や耕作土層は丘陵部から谷地形に及び、今回の調査区内はほぼ全域にわたり耕作地として再度利用されたことが明らかになった。

今回の調査では丘陵部は言うまでもなく谷地形を含め多くの成果を得ることができた。この調査成果が平成13年度大尾遺跡調査や、平成15年度太秦遺跡調査と密接な関連があることは前述した通りであるが、本書では調査成果の報告に留まり、掘り下げて考察を加えることはできなかった。現在も当該地周辺では同様の事業計画に基づく発掘調査が継続的に実施されている。今後、それらの調査成果によりさらに検討が加えられることによって北河内地域の歴史が明らかにされることを期待したい。

註

1）寝屋川市地形図（１：2,500）を基に現況等高線を復元した。

2）市本芳三 2004年「太秦遺跡の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会（第49回）資料』（財）大阪府文化財センター

なお、図24中の「平成15年度太秦遺跡調査区」は上記資料から転載した図を調整して使用した。

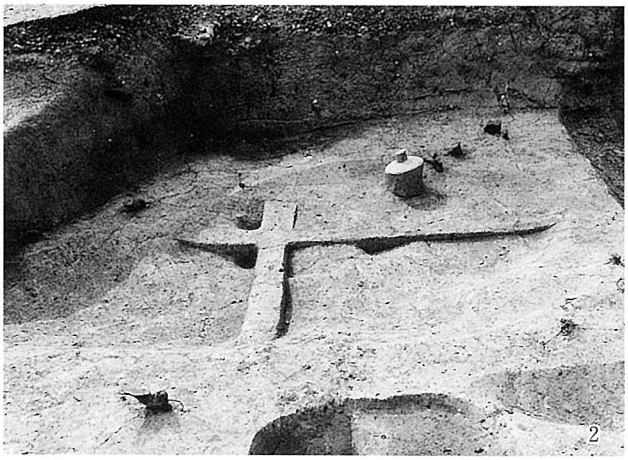
写　真　図　版

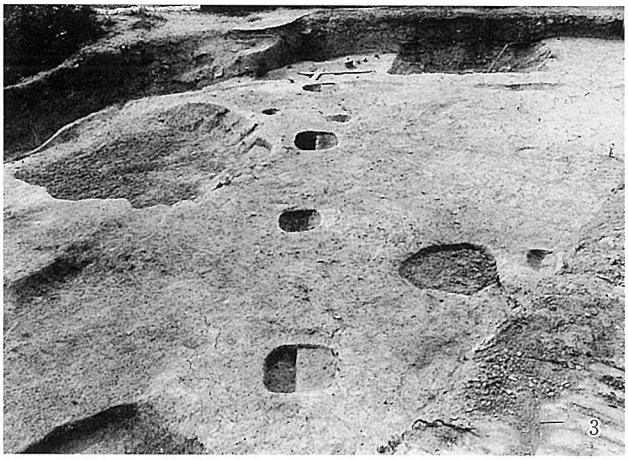
1　１区　全景（北東から）

2　１区　北半全景（西北西から）

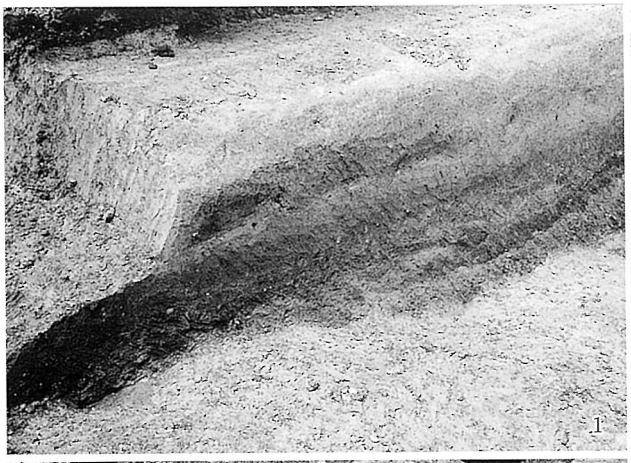
図版２．遺跡

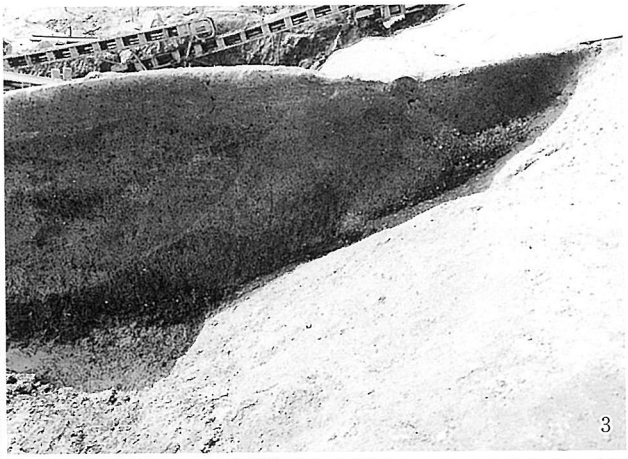
1　１区　７谷全景（南南東から）



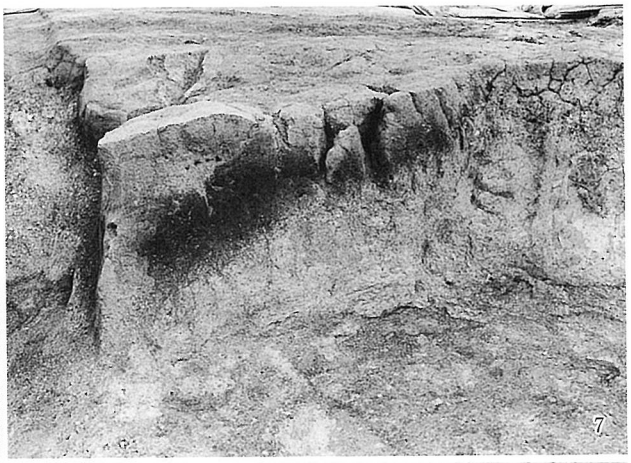


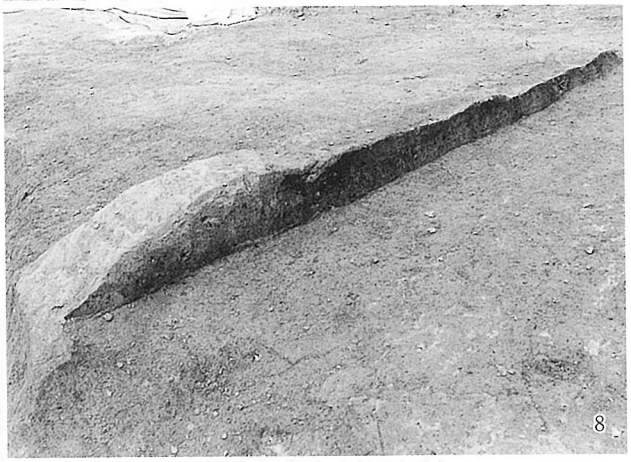
2　１区　19土坑（東から）
3　１区　柵１（東から）
4　１区　５溝（北西から）
5　１区　４溝・17溝（西北西から）





1　１区　７谷東西断面（東から）
2　１区　７谷南北断面１（南南東から）
3　１区　７谷南北断面２（南東から）
4　１区　７谷北肩口遺物包含層（南東から）





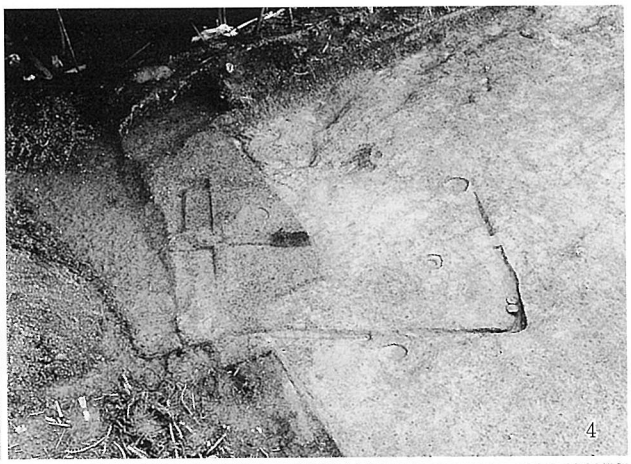
5　１区　７谷遺物出土状況（南西から）
6　１区　７谷北肩口遺物出土状況（北東から）
7　１区　７谷東部遺物包含層（南西から）
8　１区　７谷南東部遺物包含層（南西から）

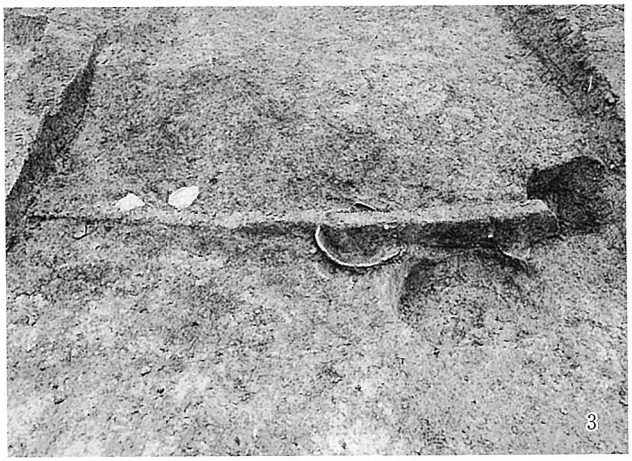
図版４．遺跡

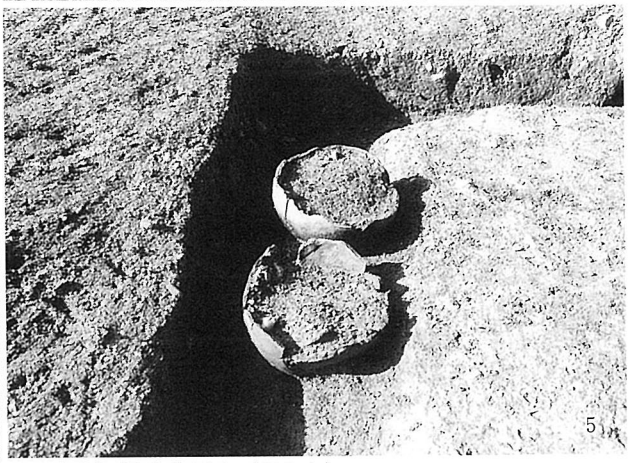
1　２区　南半全景（北西から）

2　２区　南東部全景（北北西から）

1　２区　北東部全景（北西から）



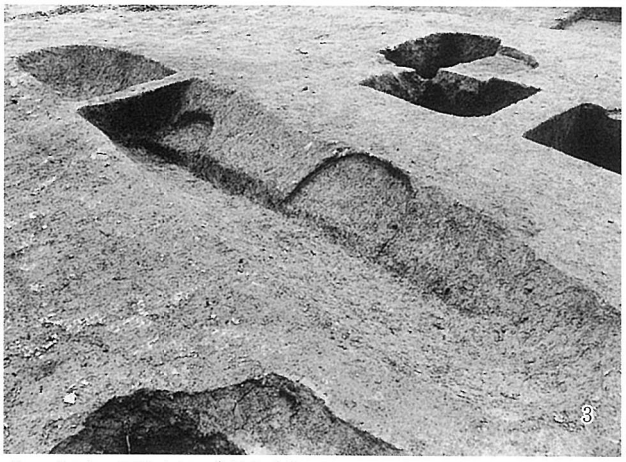




2　２区　竪穴住居２・３（西北西から）
3　２区　338土坑（南東から）
4　２区　竪穴住居１（西から）
5　２区　竪穴住居１内土器検出状況（東から）

図版６．遺跡

1　２区　建物３（東から）



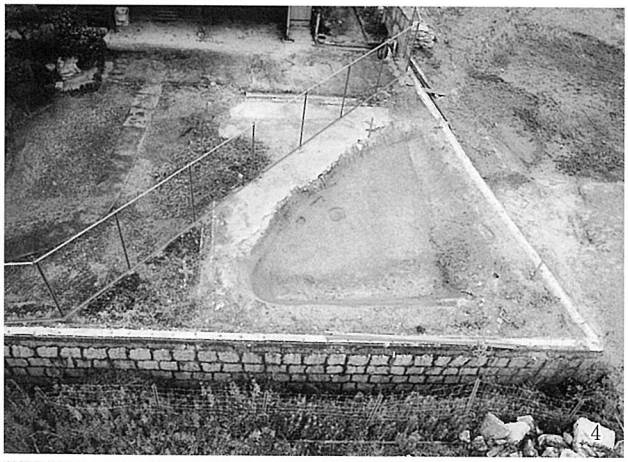
2　２区　180土坑（東から）
3　２区　181溝（南西から）
4　２区　建物１・２（北から）
5　２区　建物４（東から）

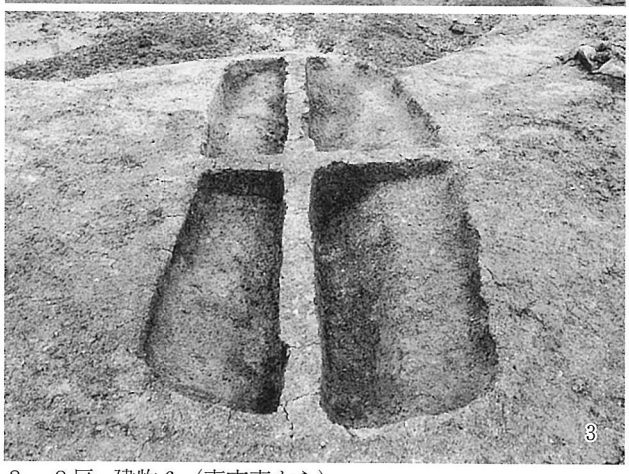
1　２区　建物11～14（北北東から）

2　２区　建物５（北北西から）
3　２区　建物12（北北東から）
4　２区　建物７・８（北から）
5　２区　建物９・10（北北東から）

図版８．遺跡

1　２区　北半全景（西南西から）





2　２区　建物６（東南東から）
3　２区　200土坑（南南西から）
4　２区　西端全景（南南西から）
5　２区　西端柱穴検出状況（南東から）

1

4

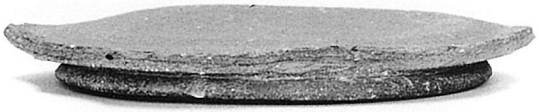
2

5

3

6

8



9

10

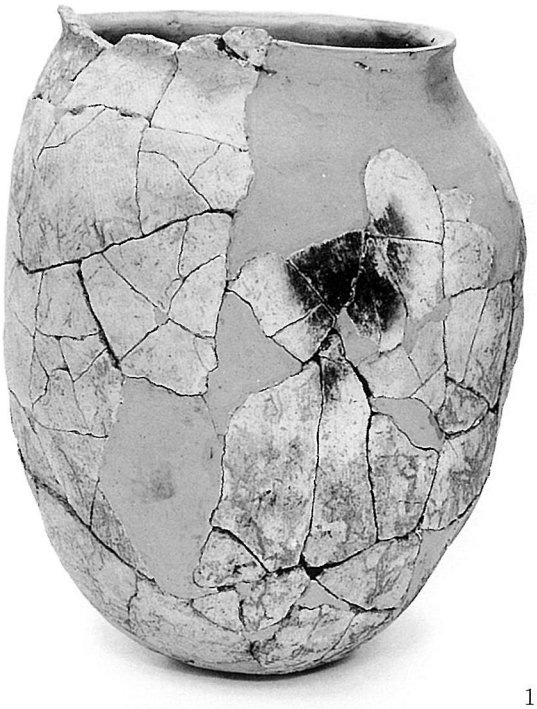
7

1：338土坑　2・7・8：19土坑　3：213土坑　4～6：竪穴住居１　9・10：133土坑

図版10．遺物

12

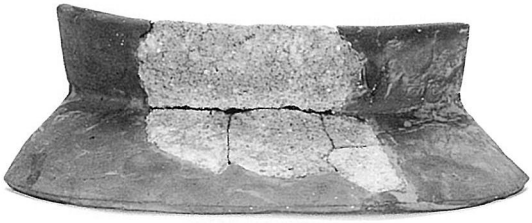
13



16

14

20



15

19

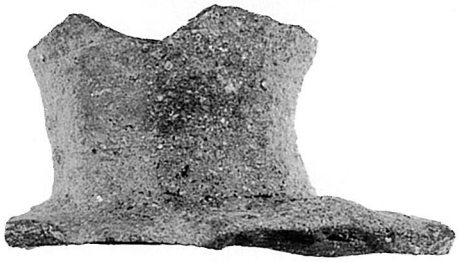
27

12：竪穴住居１上面　13～16・19・20：７谷古代遺物包含層　27：７谷北肩口遺物包含層

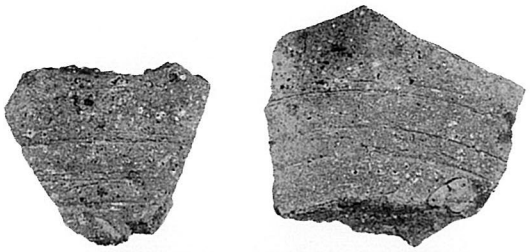
25

23

24



21

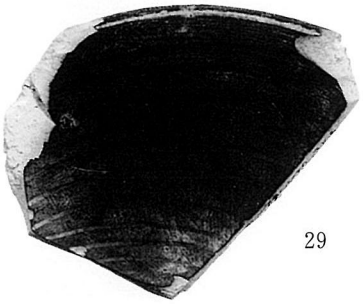


22

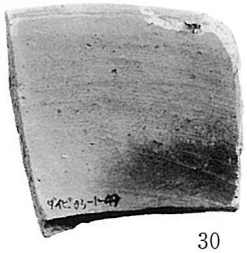
26

18

17



29



30

28

31

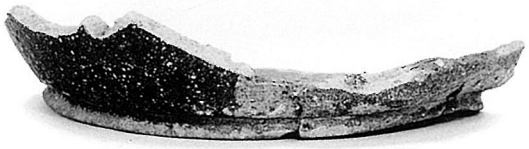
17・18・21・22：7谷古代遺物包含層　23：7谷南東肩口遺物包含層　26：7谷北肩口遺物包含層　24・25・28～31：7谷中世遺物包含層

図版12．遺物

33

37

34



38

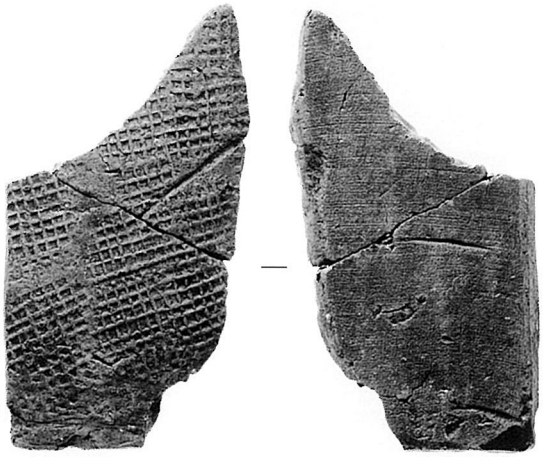
35

39

42

40

43



44

33～35・37～40：古代整地土層　42：中世遺物包含層　43：建物３　44：５溝

報告書抄録

ふりがな	だいびいせき
書名	大尾遺跡Ⅱ
副書名	一般国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第125集
編著者名	辻　裕司・清岡廣子
編集機関	（財）大阪府文化財センター
所在地	〒590－0105　大阪府堺市竹城台３丁21番４号　大阪府教育委員会文化財調査事務所３F
発行年月日	2005年２月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
だいびいせき 大尾遺跡	おおさかふねやがわし 大阪府寝屋川市 くにもりちょう 国守町	27215		34° 45′ 17″	135° 38′ 57″	2003.5 ～ 2003.12	4,143㎡	一般国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設

所収遺跡名	遺跡種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大尾遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居	弥生土器	弥生時代中期の竪穴住居を検出し、大尾遺跡では初例となった。古代では竪穴住居および掘立柱建物を多数検出した。高宮廃寺跡など当該地周辺の遺跡との関連が注目できる。
	集落	古代	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝・谷地形・整地層・包含層	土師器・須恵器・瓦	
	耕作地	中世	溝・包含層	土師器・瓦器	

(財)大阪府文化財センター調査報告書　第125集

大　尾　遺　跡　Ⅱ

一般国道１号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2005年２月28日

編集・発行／財団法人　大阪府文化財センター
大阪府堺市竹城台３丁21番４号

印刷・製本／株式会社　中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南２丁目６番８号